

VIEW21

ビュー21

2013

Vol. 3

小学版

特集

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

総論 東京都杉並区立堀之内小学校校長 **渡部公威** / 同校教諭 **竹内不二子**
ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室室長 **木村治生**

学校事例 福井県敦賀市立中央小学校 / 新潟県妙高市立妙高高原南小学校
神奈川県川崎市立南百合丘小学校

展望 早稲田大教職大学院教授 **田中博之**

私を育てた
あの時代、あの出会い

京都府京都市立高倉小学校校長 **門田真澄**

Benesse発
これからの教育

東京都多摩市立南鶴牧小学校 絵の制作を通じた交流でグローバル意識を育む

つながる
学校と家庭の学び

佐賀県伊万里市立南波多小学校 学習習慣定着と授業研究に小中が連携して取り組む



特集

3 家庭学習で
学ぶ意欲を伸ばす

4

総論

保護者と学習状況を共有し、受け身ではなく
「自ら取り組む」家庭学習へ東京都杉並区立堀之内小学校校長 渡部公威 / 同校教諭 竹内不二子
ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室室長 木村治生

10

学校事例1

家庭学習の振り返りと自学ノートで自ら学ぶ姿勢を身に付ける

福井県敦賀市立中央小学校

14

学校事例2

授業と授業をつなぐ家庭学習で主体的に学び続ける意欲を育む

新潟県妙高市立妙高高原南小学校

18

学校事例3

タブレット端末を活用し、個々に応じた家庭学習で意欲を伸ばす

神奈川県川崎市立南百合丘小学校

22

展望

家庭学習を習慣化することで育つ
「自己マネジメント力」を生涯の宝に

早稲田大教職大学院教授 田中博之



連載

1

私を育てたあの時代、あの出会い

授業は子どもと教師でつくるもの、その土台を学んだ研究会での日々

京都府京都市立高倉小学校校長 門田真澄

26

Benesse発 これからの教育

絵の制作を通じた交流でグローバル意識を育む

東京都多摩市立南鶴牧小学校

28

つながる学校と家庭の学び

学習習慣定着と授業研究に小中が連携して取り組む

佐賀県伊万里市立南波多小学校

32

読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

私を育てた
あの時代、あの出会い

第14回

授業は子どもと教師でつくるもの その土台を学んだ研究会での日々

京都府 京都市立高倉小学校校長 門田真澄 MONDEN MASUMI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、門田校長が語る。

大切なのは
教師として学びたい気持ち

のだろうかと不安でいっぱいでした。どんな授業をすればよいのか悩む私に八木校長はこう言われました。

振り返ると、私の教師としての転機は、八木佐喜子校長との出会いにあったのだと思います。教師になって12年目、赴任3つめの小学校で、八木校長から翌年に控えた近畿音楽教育研究大会での公開授業を任せられました。私は何度か音楽主任を務めていましたが、専門は算数で、音楽教育に造詣が深いわけではありませんでした。しかも、校内研究しか経験がなく、他校から大勢の教育関係者が参加される公開授業など出来る

「一生懸命やっていたら、力は後から付いてきます。自分をもっと高めたい、学びたいという気持ちで研鑽を積むことが大切です。自分には大役だと思っても、そうした機会を与えられるだけの力があるから任せられているのです。背伸びをする必要も自分を卑下することはありません」

その言葉に、私は肩の荷が少し下りました。先生の紹介で、さっそく市の音楽教育研究会に入り、私なりの授業づくりが始まりました。



もんでん・ますみ 専門教科は算数。京都市立御所南小学校などを経て、京都市立高倉小学校に赴任。研究主任、教頭を務めた後、校長に着任。京都市算数教育研究会研究部長、国立教育政策研究所教育課程実施状況調査結果分析委員(算数科)も歴任。

- 1979 (昭和54)
新採として
京都市立椋原小学校
に赴任
- 1984 (昭和59)
京都市立松陽小学校
に赴任。
音楽主任を務める
- 1990 (平成2)
京都市立龍池小学校
(現御所南小学校に統合)
に赴任。
近畿音楽教育研究大会に
向け音楽主任を務める



音楽の授業の様子

- 1995 (平成7)
京都市立御所南小学校
に赴任
- 2000 (平成12)
京都市立桂坂小学校
に赴任
- 2006 (平成18)
京都市立高倉小学校
に赴任。
研究主任として
「読解科」の
立ち上げに尽力。
2009年に教頭、
2012年に校長に昇任

「知識・技能を教えるだけでなく 人間的成長を促すのが授業」



市全域から教師が集まる研究会での活動は、勉強の連続でした。より良い授業をつくるという1つの目標に向かって、皆で意見を出し合い、他校の授業を見に行き、新たな指導を授業で実践し、その成果を発表して、また意見を出し合う。当時研究会副会長を務めておられた八木校長や他の先生からもアドバイスをいただき、自分の視野がどんどん広がっていくのを感じました。

公開授業のテーマは「音楽をつく

る」でした。子どもが校内を歩いて、楽器だけでなく、身の回りのものを叩いたりこすったりして音を探し、それらを組み合わせる曲をつくるグループ活動です。

この授業づくりを通して、私の授業観は大きく変わりました。音楽の授業の目的は、上手に歌い、楽器を演奏するという音楽の技能を教えることだと思っていました。しかし、曲をつくる子どもの姿に、授業では自分の思いを豊かに表現する力も育

てられるのだと気づきました。

更に、授業は子どもと教師でつくるものだと感じました。私はグループ活動を音楽の授業で行うのは初めてで、子どもの発言を上手につなげたとは言い難いものでした。それでも、子どもが自分の意見を発表し、他の人の意見も尊重し、皆で協力して行った楽曲づくりは、子どもたちと私とでつくり上げた授業だと実感の持てるものでした。そして、人と人とかかわって物事を進めていくことは、思いやりの心を育む人権学習の場にもなると気付いたので。授業は知識・技能を教えるだけの場ではなく、子どもと教師でつくり上げ、子どもの人間的成長を促す場——私は授業の可能性、そして研究の重要性を改めて実感しました。

**子どもと接する先生に
元気で温かくいてほしい**

大会後、グループ活動を授業に取り入れ、また専門を追究したいと算数教育研究会に入ってから、この時の経験が生かされました。しかし、悩むこともよくありましたし、子育てをしていた時期でしたので、その大変さもありました。そんな

時、八木校長から、授業で改善した方が良い点や励ましの言葉など、よく声を掛けていただきました。子どもが熱を出した時には「今日は早く帰りなさい」と配慮していただいたこともあります。いつも声を掛けられていることは、自分を見てもらっている、大切にされると感じ、頑張ろうと意欲が持てました。そして、校長として多くの難しい課題があったはずなのに、教職員の前では常に笑顔でおられました。

八木校長が退職された後、そのことを本人に伝えると、「教職員を大切にすれば、教職員は子どもたちを大切にしてください。教職員が安心して仕事に打ち込み、子どもと向き合える学校にしよう」と心掛けていました」と言われたのです。

それはそのまま、今の私の心掛けとなっております。校長1年目の昨年、「誰もが楽しいと思える学校に」、2年目の今年「笑顔とあいさつがあふれる学校に」を掲げました。教職員がいつも元気で温かい気持ちで子どもたちの前に立てるよう、温かな学級をつくることができよう、これからも学校づくりをしていきたいと思えます。

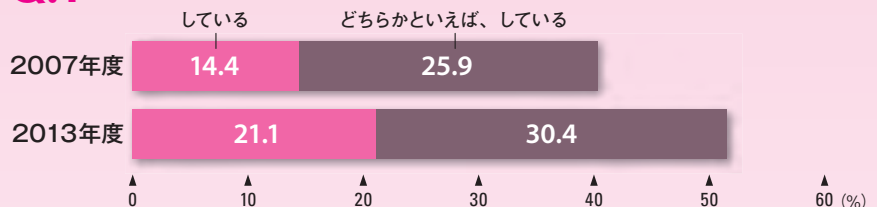
特集

家庭学習で 学ぶ意欲を 伸ばす

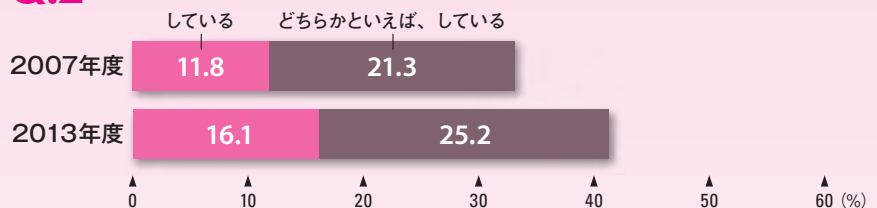
2013年8月に発表された文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査報告書」では、家で授業の予習や復習をしていると回答した児童の割合に増加傾向が見られた。授業だけではなく、家庭でも学んだ内容を振り返り、次の授業が心待ちになるような準備ができる姿勢は、今後ますます求められるだろう。今回の特集では、家庭学習を通じて、一人ひとりの学力や意欲を伸ばす方法や、学校と家庭との協力関係について考えたい。

家で予習や復習をすると答えた子どもが増加

Q.1 家で、学校の授業の復習をしていますか



Q.2 家で、学校の授業の予習をしていますか



出典／文部科学省「平成25年度 全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」(2013)
調査対象は小学6年生。2007年度は1,139,492人、2013年度は1,121,164人

保護者と学習状況を共有し、受け身ではなく「自ら取り組む」家庭学習へ

小学校の段階で自ら学習する姿勢が身に付けば、その後、生涯にわたって学び続ける大きな力となるに違いない。東京都杉並区立堀之内小学校の渡部公威校長と、同校教諭の竹内不二子先生に、家庭学習の充実を図る上で欠かせない保護者との連携の方法などについて、ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室の木村治生室長が聞いた。

●家庭学習の実態と課題

保護者の多忙さや意識が家庭学習への姿勢に影響

木村 本日はよろしくお願ひします。最初に、家庭学習を充実させる上で課題と感じていることをお聞かせください。

渡部 家庭学習の目的は、授業で学習した内容の習熟に加え、学習習慣の定着を図ることにあると考えています。特に、子どもが自ら学ぶ習慣を付けることを重視していますが、実際には「宿題だからやる」という受け身の姿勢がなかなか抜けません。低学年のうちから、短時間でも自主的に学ぶ習慣が付くよう指導することが大切です。

木村 学習に向かう姿勢は個人によって差が

大きいと思いますが、その点はどう捉えていますか。

渡部 公立小学校における共通の課題だと思いますが、低学年の段階から家庭での学習内容や量については個人差がかなりあります。要因の1つと考えられるのは、保護者の子どもへの接し方です。学習に対する考え方は家庭によって異なりますし、共働き家庭の増加によって、子どもの学習を支援する時間的余裕を持ってないケースも見られます。特に、低学年の時期から、子どもに励ましの声を掛けたり、「一緒にやろう」という態度を示したりして、保護者が「見守る存在」になることで、子どもの意識は前向きになります。こうした点を踏まえて、保護者にアプローチする必要性を感じています。

前向きな気持ちを育て自ら取り組む意欲を引き出す

木村 ベネッセ教育総合研究所と朝日新聞社が2012年に共同実施した「学校教育に対する保護者の意識調査」を見ると、ここ10年程で、子どもの家庭学習時間は伸びているという結果が出ています。しかし、学習は、量だけでなく、質も重要です。「言われたからやる」学習ではなく、「自分からやりたくてやる」学習へと導くのは、なかなか難しいことだと感じます。

渡部 私もそう思います。やはり、どれだけ長時間、机に向かったとしても、「宿題だから」という気持ちでは学習効果はあまり望めません。自ら学ぶ意欲を育てるためには、学

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

東京都杉並区立堀之内小学校校長

渡部公威

わたなべ・こうい ◎東京都公立小学校教諭、杉並区立富士見丘小学校教頭、国立市立国立第五小学校校長、台東区教育委員会指導室長などを経て現職。



東京都杉並区立堀之内小学校

竹内不二子

たけうち・ふじこ ◎4学年担任。講師・産育休代替教諭として学級担任を経験後、現職。



東京都杉並区立堀之内小学校 ◎教育目標は「考える子ども、やりぬく子ども、助け合う子ども」。2010年度に「コミュニティ・スクール」に指定され、地域と一体感のある教育活動に力を入れる。児童数448人。

校の授業の内容に興味を持たせることが最も大事だと思えます。その日の授業を振り返り、「この問題も出来るかもしれない」「ここをもう少し調べてみたい」といった思いを持って、自分から学びに向かうからです。

木村 授業と家庭学習をどう結び付けるかが、自ら学ぶ姿勢を身に付ける鍵となるのではないかと考えます。授業との関連で家庭学習をどのように位置付けるか、よく検討する必要があります。

竹内 家庭学習では、基礎・基本となる学力の定着を目指して授業を補う学習をさせることが多いと思います。特に、低・中学年は自分で課題を見付けることが難しいので、読書、音読、漢字や計算の練習といった宿題が多くなります。例えば、国語の授業では読解などに重点を置くため、音読や漢字の習熟についての時間を授業中に十分に確保することは難しくなるので、宿題として家庭で学ばせます。そのような学習の積み重ねがなければ、基礎・基本は定着しないと思えます。

宿題はどうしても「言われたからやる」という意識になりがちですが、前向きな気持ちを持たせる工夫は出来ると思います。今、私は4年生の担任をしています。クラスでは宿題を提出したら自分で丸を付けるチェックシートを活用しています。簡単な方法ですが、丸が付いていない子どもに「今日はどうしたの？」と一声掛けるだけで、「やらなくては

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 室長

木村治生

きむら・はるお ◎ベネッセコーポレーション入社後、初等・中等教育領域を中心に子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究などを担当。文部科学省や経済産業省、総務省から委託を受けた調査研究にも数多く携わる。



いけない」という意識が芽生えます。また、漢字の定着を図る時は、学力差を考慮するため、最初に小テストを実施し、その結果を基にして、子ども一人ひとりに目標を設定します。小テストの前日にはテスト範囲を宿題にすれば、「合格点を取りたい」と思い、子どもたちは頑張って宿題に取り組みます。

木村 目標を持たせることによって、宿題に対する姿勢を変えるわけです。

竹内 そうです。仕事で遅い時間に帰宅する保護者は、子どもの学習を見てあげたいという思いはあっても、なかなか実行できません。それでも、子どもから「明日、小テストがあ

るから、ここを教えて」と言われれば見てあげようという気持ちになるでしょう。そのように、子どもが学習に意欲を持つと、保護者に対して言葉や態度で自然に働き掛けるようになります。そうすると保護者にも、「子どもが頑張っているから支えてあげたい」という意識が生まれます。

家庭学習の課題設定を工夫し 次の授業への期待や意欲を高める

木村 そのほかに授業と家庭学習をつなぐ観点から指導の工夫についてお聞かせください。

竹内 基本的な指導で心掛けているのは、家庭学習に授業と授業をつなぐ役割を持たせることです。例えば、4年生の算数の授業で、平行線の引き方を学んだとしましょう。その日の宿題は、平行線を引く練習にします。そして、翌日の授業では、家で練習してきた平行線の引き方を活用し、平行四辺形の学習に入ります。特に、算数などはスモールステップを積み重ねて学び進める教科ですから、授業の内容をその日の家庭学習で習熟させて、次の授業につなげるようにしています。

渡部 家庭学習で予習的な学習に取り組みせて、次の授業への期待感や意欲を高める指導も考えられると思います。

竹内 予習的な学習は、社会などでよく取り入れています。例えば、事前に自宅にある外国製の製品をリストアップしてもらい、授業

で世界と日本のつながりを考える材料にするといった学習です。

木村 子どもの学力差に応じて宿題を個別に設定することは、現実的には難しいものなのではないでしょうか。

渡部 漢字や計算の練習など習熟のための宿題は、一律に行うことが大半です。しかし、漢字の意味調べなどは、同じ課題であっても、子どもによって取り組み方は異なります。一生懸命に長時間を掛けて調べる子どももいれば、サツと終わらせてしまう子どももいます。そのような違いから、子どもの姿勢や関心を把握して手立てを考えることが出来ます。

竹内 子どもは、課題の種類によって得手不得手があります。一律にすると負担感が異なるため、音読であれば、読む回数は自分で決めるようにして個人差に対応しています。

木村 長期休業中は、普段とは家庭学習の性質やねらいが変わると思いますが、どのような指導をされていますか。

渡部 長期休業中は、工作や研究などにじっくり取り組めます。自由研究について、事前に「こんなテーマがあるよ」と提示することで興味・関心を深めています。

竹内 長期休業中には、普段体験できないことにとことんチャレンジしてほしいと思っています。さまざまな体験を通して豊かな気持ちになり、自分の好きなことややりたいことを見付けることが、生涯教育の基盤になると

思うからです。

●保護者に期待する1つ

低・中・高学年で異なる 家庭学習における保護者の役割

木村 先ほど保護者への支援が必要というお話がありましたので、その点について掘り下げてお聞きしたいと思います。まず家庭学習について、保護者にはどのようなかわり方を期待しているのでしょうか。

渡部 それは、子どもの発達段階によって違うと思います。低学年の保護者には、「一緒に取り組む」ことを特に期待しています。子どもが学習したり読書したりしている時に、保護者が同じ時間を共有しようとする態度を示すと、子どもの関心が深まるからです。

中学年では、家庭での学習状況を把握し、面談や連絡帳などを通じて、担任と共有することを心掛けていただきたいです。次第に学習内容が難しくなり、保護者が子どもに教えられない場面が出てくることや、「子ども一人で学習させて自立させたい」といった思いから、子どもの学習にかかわらなくなる保護者が増えてくるのですが、子どもの家庭学習に関心を持つことは大切です。

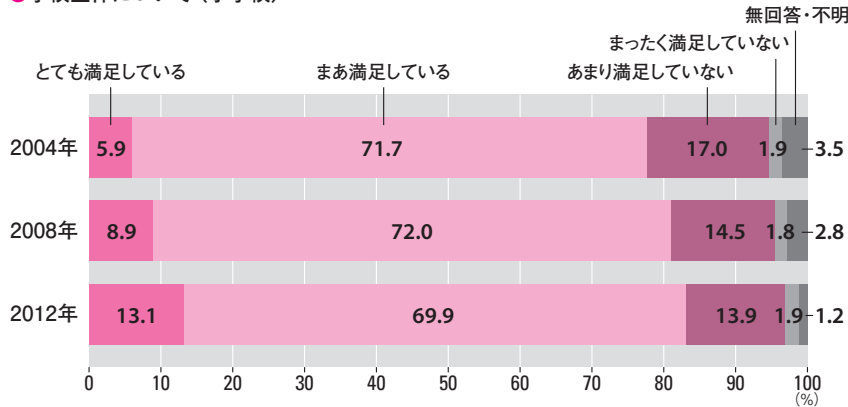
更に、高学年では、思春期に差し掛かることもあり、多くの大人がかかわる必要が生じます。保護者にも、心配や不安があれば、担任だけではなく、学年の他の先生に相談した

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

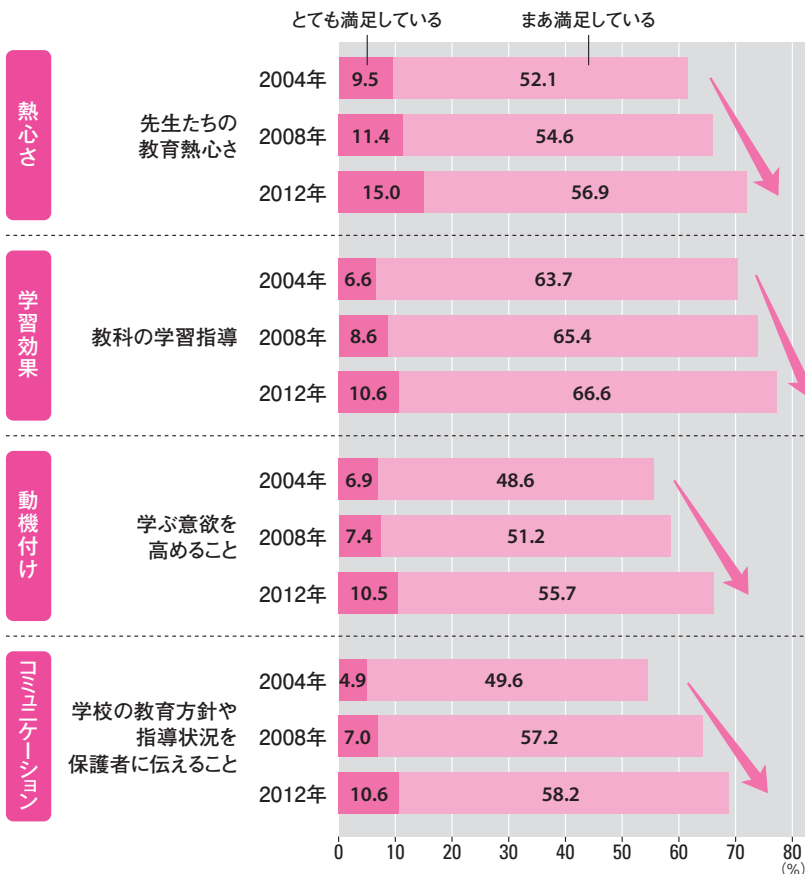
図1 学校に対する保護者の満足度

Q. あなたは学校の取り組みに対して満足していますか

●学校全体について（小学校）



●個別の取り組みについて（総合満足度と相関の高い上位4項目）



保護者の小学校に対する満足度は、2004年度から、調査を重ねるごとに高まっている。先生たちの熱心さが伝わり、学習指導で成果を上げ、子どもを動機付け、そうした取り組みの様子をきちんと保護者に発信することが、学校に対する信頼につながっている。

出典／ベネッセ教育総合研究所、朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査2012」
学校通しによる家庭での自記式質問紙調査／全国の公立の小学2年生、小学5年生、中学2年生を持つ保護者（2004年は6,288人、08年は5,399人、12年は6,831人が対象）

り、アドバイスを求めたりすることが出来ることを伝えています。

●保護者との関係構築に向けて

保護者と家庭学習状況を共有し個別指導につなげる

木村 家庭学習に限りませんが、保護者の協力を得るためには、まず学校に対する信頼感を得ることが重要です。

その点で興味深いデータがあります。冒頭で触れた「学校教育に対する保護者の意識調査」では、ここ10年程で、保護者の小学校に対する満足度は高くなっています（図1上）。満足度と相関が高い取り組みは、「先生たちの教育熱心さ」「教科の学習指導」「学ぶ意欲を高めること」「学校の教育方針や指導状況を保護者に伝えること」であることも分かりました（図1下）。こうした保護者の意識

変化は、小学校の努力の賜物たまものといつてよいでしょう。その一方で、現場の教師が、多様な家庭への対応に苦慮している様子がかがえます（P.8図2）。家庭への対応において、工夫されていることをお聞かせください。

渡部 学校と保護者が学習内容を共有することがポイントだと考えます。低学年のうちから、保護者が子どもの学習に関する習慣を付けておくのです。その上で、学校が保護者

図2 家庭学習に関する取り組みと課題

取り組みの内容	課題
家庭学習の手引きの配布	・保護者に意識のばらつきがあり、一律にはお願ひしにくい
連絡帳の活用	・一人ひとりの提出物に丁寧なコメントを書く と時間が掛かる
本読み、漢字、算数(計算)の宿題	・子どもの学力差に対応しきれない
「自学」の推進(ノート作成)	・ノートの確認に時間を要する
懇談会や学校・学年だより、ホームページでの情報発信	・ICT環境の違いのフォローが必要 ・本当に伝えたい保護者には伝わらない

家庭学習の手引き作成、連絡帳の活用、習熟中心の宿題、自学ノートなどによって、家庭との連携を図っている。しかし、保護者の意識のばらつきや、丁寧な宿題指導には時間が掛かるという課題が顕在化している

* [VIEW21] 小学版読者モニターアンケート結果を整理して掲載

から子どもの家庭学習の状況について話を聞く機会を設けると、個々の学習支援に生かせると思います。例えば、子どもが宿題をしなかった理由は、「時間がなかった」からなのか、「課題が難しすぎた」からなのか、保護者から子どもの様子を聞くことで次の指導に生かされます。

また、保護者に音読を聞いてもらう宿題でも、単にチェックカードに丸を付けるだけではなく、「漢字に詰まることがあったけど、最後まで読めた」「以前に比べて滑らかに読めるようになった」などコメントを添えても

例えば、家庭での学習状況を把握できますし、子どももそのコメントを読み、自信を付け、「次も頑張ろう」と思えることに結び付きます。

竹内 学習に苦手意識を持つ子どもは、家庭学習もおろそかになりがちで、ちょっとした課題にも時間を掛けてしまうことがあります。そういう時こそ、保護者の協力が大切だと思います。学校と保護者が子どもの苦手分野を共有しておけば、学校と家庭でフォローしやすくなります。

家庭で育む「生活力」を基盤に 学力と体力を伸ばす

木村 保護者を巻き込むことの大切さが伝わってきました。それでは、学校が保護者とのコミュニケーションを深めるためには、どのような働き掛けが効果的なのでしょうか。

渡部 本校では、年度初めの学校説明会で教育の根底にある考え方を説明し、同じ目線で子どもを育てるように努めています。具体的には、学校は子どもの学力や体力を伸ばすために精一杯努力をしますが、その基盤となる

「生活力」の向上は家庭の協力が不可欠であることへの理解を求めています。家庭生活や教育環境を整え、心を安定させなくては、子どもが安心して学びに向かうことは出来ないからです。また、基本的な学習規律や授業の進め方など、全学年共通のルールを定め、ど

のクラスでも共通の指導をしていることをアピールし、学校に対する信頼感を醸成するよう努めています。

竹内 子どもと同様に、保護者の意識も違うことは当たり前です。それを踏まえ、年度初めに、毎日宿題を出すから出来る限り支援をお願いしたいことなど、家庭学習の方針について共通認識を図るようにします。最初に理解を促しておくことで、家庭の協力は得やすくなります。

地域と一体化した学校づくり

本音を隠さずに伝えることから 協力関係が生まれる

木村 保護者の話を聞くために、どのような機会を設けていますか。

渡部 保護者との二者面談を大切にしています。本校では、以前は2学期に行っていましたが、出来るだけ早い時期が良いと考え、5年ほど前から夏休みの初めに実施しています。ここで保護者から子どもの様子や悩みをじっくり聞き、2学期からの指導に反映させています。

竹内 面談を通じて家庭での様子を伝えてもらうことで、子どもへの理解は深まります。保護者には、日ごろから連絡帳などを活用し、ちょっとしたことでも情報を共有してほしいと話しています。

渡部 保護者と目線を合わせるには、学校と

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす



保護者が、言いづらいことも本音で伝え合う必要があります。互いに良いことだけしか言わなければ、子どもが置き去りになって適切なフォローが出来なくなります。

竹内 包み隠さずに状況を伝え合うことは、とても大切だと思います。以前、クラスが落ち着かなかった時期に、保護者会で「学級が

大変な状況であること」「学校の教育力に至らない点があったこと」などを話し、家庭でも気になることは注意をしてほしいなど協力を求めました。すると次第に、クラスは落ち着きを取り戻しました。子どもにも課題があったとしても、それを前面に出して話すと、保護者は責められていると感じてしまいます。最初に学校側が至らない点を認めたことで、保護者も心を開いて、共に問題に取り組む協力関係が築かれたのだと思います。

心強い「応援団」である 保護者や地域の知恵を借りる

木村 保護者を含む地域との連携において力を入れていくことは何でしょうか。

渡部 本校はコミュニティ・スクールとしての取り組みを進めています。それがそのまま直接的に学力や体力の向上につながるかは考えていません。しかし、学校という枠だけで完結せず、毎日通う地域の方々に見守られているという実感は、「この地域に生まれて良かった」といった気持ちの安定につながります。それによって子ども同士の間関係が良くなったり、学習に集中できたり、さまざまな利点があります。

学校運営協議会は、困ったら駆けつけてくれる応援団のような存在で、とても心強いです。学校として、困っていることを伝え、地域の皆さんと一緒に子育てを育てたい

と考えています。

木村 最後に、校長先生をはじめ、管理職の先生方に求められる心掛けについてお話しください。

渡部 知恵を出してくれる保護者や地域住民がたくさんいることを忘れないようにしています。協力関係を深めるためには、学校が正直になって、「悪い情報ほど先に出す」という態度が大切だと思います。

また、校長として、担任による指導の差が生じないように配慮しています。例えば、学年で宿題の量などを相談し、学級の足並みをそろえています。本校は教科担任制を導入していますが、これも学級間のばらつきを緩和する効果があり、保護者に支持されています。杉並区では、保護者や子どもにも学校満足度のアンケートを実施しており、本校の肯定率は89%です。一見高い数字と思えますが、むしろ少数でも否定的な回答があることに注目しています。保護者には結果を伝え、共に学校づくりを考えるきっかけの1つとしてもらっています。

木村 保護者や地域と手を携えて子どもを育てるという思いがよく伝わってくるお話でした。当研究所でも、学校でのご指導に役立てていただけるよう、引き続き、児童や保護者の実感や意識について調査・研究・発信を行っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

家庭学習の振り返りと自学ノートで 自ら学ぶ姿勢を身に付ける

福井県 敦賀市立中央小学校

学力は高いが、学習に意欲的に向かう姿勢に課題が見られた敦賀市立中央小学校。1年生から、家庭学習の様子を振り返るシートを活用して、自主学習を意識させると共に、3年生からは「自学ノート」で自分で考えた学習に取り組むことを習慣付けている。学年が上がるにつれて、次第に意欲的に自主学習に向かう習慣が定着しつつあるという。

取り組みのねらい

- 子どもが意欲的に学習に向かう姿勢を育てる
- 与えられたことに取り組むだけでなく、自ら求めて学ぶ子どもを育てる
- 保護者と目線を合わせて、共に子どもを育てる関係をつくる

取り組みの内容

- 全校の子どもや保護者を対象に家庭学習に関する実態調査を行い、指導内容を検討
- 家庭での学習や生活の計画を立てさせ、見通しを持って毎日を過ごさせる
- 学年が上がるにつれて、自ら課題を見付ける自主学習の割合を増やす

取り組みの成果

- 時間的な見通しを持てるようになり、家庭学習の時間を確保できるようになった
- 高学年では、進んで自主学習に向かう姿勢が定着しつつある

S c h o o l D a t a

◎1982(昭和57)年開校。教育目標は「確かな学力と豊かな心でたくましく生きる子の育成」。福井県小中連携教育推進事業推進校として、地域の中学校と連携し教育力の向上に努める。



校長 中西恵一先生

児童数 542人 学級数 19学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒914-0121 福井県敦賀市野神40-249

TEL 0770-24-0020

URL <http://edu.ton21.ne.jp/cyuo/>

公開研究会 未定

● 取り組みのねらい

意欲的に自ら学習できる
姿勢を身に付けてほしい

2013年度で創立32年を迎えた敦賀市立中央小学校は、敦賀市の中心部に位置する。創立時は水田に囲まれた環境だったが、次第に住宅地や商業地が開発され、今では県内外から多くの人が移り住む地域となっている。

子どもは落ち着いており、学力調査の結果も良いのだが、学習に向かう姿勢には課題が感じられると、中西恵一校長は話す。

「子どもたちの学力は高いのですが、学習にあまり意欲的に向かえていないようです。

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

言わないと学習に取り組めない子どもも見られます」

保護者の子どもの教育へのかかわり方にも温度差がある。学習ボランティアなどへの参加に熱心で協力的な保護者がいる一方、保護者会にあまり参加せず、学校に任せたいという姿勢の保護者もいるため、保護者への働き掛けも、重要な取り組みと位置付けている。

● 取り組みの内容

「家庭でも自ら学べたか？」を1年生から振り返る

同校は、10年以上前から「自ら求めて学ぶ子の育成」をテーマに「授業」と「自主学習」の両面から研究に取り組んでいる。

「学校でも家庭でも、自ら求めて学ぶ子どもの育成を目指しています。そのためには、授業と家庭学習の双方を充実させ、相互の関連を深める必要があると考えています」（中西校長）

授業研究では、教師全員が年1回、公開授業を実施するなど組織的に取り組み、13年度は国語を中心に書く力の強化を図っている。特に、発問の工夫によって子どもの思考を促し、書くことで思考を整理させたり表現させたりする指導について研究する。

こうした授業改善と並行して進めている、自主学習力を伸ばす指導を紹介したい。中心となる取り組みは、「家庭学習チェック

カード」だ。これは、1週間単位で、生活や家庭学習について振り返り、記入するカードだ。全校児童とその保護者を対象に行った家庭学習に関する実態調査を踏まえて、12年度から年2回行っている。教務主任の滝本律子先生は次のように話す。

「調査結果で、家庭で学習しているものの、宿題が中心であり、自分から何かを学習することはあまりしていないと分かりました。また、規則正しい生活習慣が身に付いていない子どもも見られました。そこで、自分がどのように時間を使っているのかを意識させ、自分を律する力を付けさせたいと考えました」

家庭学習チェックカードは、1〜3年生用と4〜6年生用がある。共通する内容は、生活や家庭学習について振り返るチェック項目だ。「こういう姿勢を身に付けてほしい」という思いを込めて、「言われる前に、自分から進んで学習を始めた」「宿題以外の学習もした」などを設定して、毎日振り返らせている。

4〜6年生用には、学習する時間を見通せるよう、更に1週間の計画を立てる欄を設けている（写真1）。家庭学習や塾での学習、運動、習い事などの時間を色分けして記入し、計画を立てる。5学年

家庭学習計画&チェックカード
★見通しをもち、計画を立てて取り組みましょう。

年 組	10月1日	10月2日	10月3日	10月4日	10月5日	10月6日	10月7日
家で過ごす方の計画を立てましょう。	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00
【赤】家庭学習の時間	18:00	17:00	17:00	17:00	17:00	17:00	17:00
【青】塾での学習時間	18:00	18:00	18:00	18:00	18:00	18:00	18:00
【緑】スポーツ等での運動時間	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00
【黄】習い事の時間 (食事や就寝の時刻などをいれてもらいます)	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00	08:00
言われる前に、自分から進んで学習を始めた							
決まった場所で学習できた							
テレビやパソコンゲームを消して学習できた							
自分で決めた学習時間を守った							
学校で出された宿題を全部守った							
宿題以外の学習をした							
読書や新聞や雑誌を毎日読んでみた							
今日の学習時間	70分	分	分	分	分	分	分
できればチェック							

下欄には「下欄を振り返って、「がんばったこと」や「気づき」を付けてください」とあり、手書きの感想が記入されている。また、「できればチェック」欄には「振り返り」の項目があり、「○進んでできた」「△できた」「×できなかった」という評価が記入されている。

写真1 4〜6年生の家庭学習チェックカード。チェック項目と1週間のスケジュールを作成する欄がある。時間の使い方が一目で分かるよう、色を分けて記入する



敦賀市立中央小学校 5学年担任。特別活動主任。「子どもと互いに丸ごとの自分を出して向き合える関係をつくりたい」



敦賀市立中央小学校 教務主任。「褒めて励まして、子どもが持つ力を最大限に引き出し、一人ひとりが輝く時間を見付け出したい」



敦賀市立中央小学校教頭 長谷川明生 「教頭は子どもと保護者と地域をつなぐ要となるポジションと心得、いつも誠実に対応していきたい」



敦賀市立中央小学校校長 中西恵一 「子どもや教員の喜びや悲しみに共感できる校長でありたい。また子どもや教員には常に笑顔で接する」

担任の清水裕子先生は次のように話す。

「時間の使い方を目に見える状態にするこ
とで、家庭学習に対する意識を高め、宿題を
やったら終わりではなく、自主的な学習の習
慣化につなげたいと考えています。また、1
週間のスケジュールを立てる際には、学級で
話し合いながら行うようにしました。友だ
ちの計画を知ることで、自分の生活を見直す
きっかけになっているようです」

家庭学習チェックカードを導入して改めて
分かったことが、子どもが多忙な毎日を過ご
しているということだ。

「子どもたちが塾やスポーツクラブに通っ
ていて、非常に忙しいことがよく分かりまし
た。何も意識させなければ、多忙な毎日に流
されて、自主学習など出来ないという実態を
よく把握できました」(清水先生)

これまでは、保護者の負担を考え、あえて
保護者の記入欄は設けていなかった。しかし、
きちんとした生活習慣を身に付けるためには
家庭の協力が不可欠であると考え、今後、家
庭学習チェックカードを保護者懇談会で活用
するなどして連携を強めていく。

3年生から「自学ノート」で 自分で考えた学習に取り組み

家庭学習の習慣化と共に、自主学習の質
を高める指導として「自学ノート」(写真2)
の取り組みも行う。これは、子どもが自由に

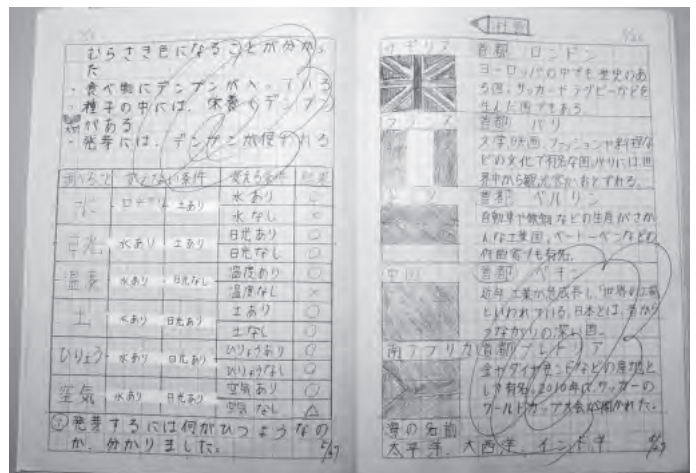


写真2 5年生の自学ノート。左ページは理科、右ページは社会の、その日の授業の内容を分かりやすくまとめている

テーマを設定して学習した内容をノートにま
とめるというもの。3年生から徐々に取り組
み、5、6年生は毎日提出する。提出したノー
トは、担任がコメントを書き、放課後までに
返却する。同校では、宿題は基礎・基本の定
着を促すもの、自学ノートを使った学習は自
ら求めて学ぶ姿勢を身に付けるものと考え、
両者のバランスは担任に任せている。

「目標とする家庭学習時間は、学年×10分
ですが、時間は同じだとしても、宿題と自学
の比率は、学年や子どもによって変わると考
えています」(中西校長)

3年生で自学ノートに取り組み始めた頃

は、漢字や計算の練習をする子どもが多いが、
次第に授業の復習をしたり、新聞を切り抜い
て感想を書いたり、理科の授業で行った実験
を自分なりに深めて整理したりと、さまざま
な学習に発展していく。中には、毎日、数時
間も自学ノートに取り組み子どももいる。

「始めは続けることが何より大切です。次
第に量が増え、質も良くなっていきます。慣
れてきたら、『もう少し、こんな学習にも取
り組んでみたら?』など、子どもが視点を変
えて取り組めるような声掛けをしています。
また、他の子どもにも参考にしてほしいノー
トは教室にコピーを掲示して紹介していま
す」(滝本先生)

なかなか自主学習が進められない子どもに
は、教師が用意したプリントをノートに貼っ
て取り組ませるなど、ハードルを下げて少し
ずつ慣れさせている。その際、決して叱った
りせず、辛抱強く、出来たことを褒めて認め
る指導を大切にしている。長谷川明生(あけお)
先生は、
次のように話す。

「ノートを確認して子どもにも返すという指
導の繰り返しですが、学習意欲の向上に確かにつ
ながっていると実感しています。また、現在、
敦賀市教育委員会では、家庭教育の充実を重
要視し、全市的な取り組みを進めています。
その取り組みに本校の具体的な取り組みをう
まく盛り込みながら、家庭学習の充実を更に
進めていきたいと思います」

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

同校が目指すのは、自分の学びの軌跡を振り返られるような、「楽しく」「美しく」「自分の参考書になる」ようなノートだという。

全校一斉に行う昼学習で 自主学習が出来る基盤をつくる

同校では、自主学習を進める土台になるものとして、基礎・基本の定着にも力を入れる。「基礎・基本がしっかり身に付いているからこそ、疑問がわき、新たな学習をしたいと思うのではないだろうか。もちろん、基礎・基本がなければ、自分で学習を進めることも難しいでしょう」（中西校長）

中心となる取り組みは「はげみの時間」だ。毎日、昼休みの清掃後の10分間、漢字の書き取り、計算練習、短作文、視写に日替わりで取り組む。漢字と計算は時間内に自己採点し、短作文や視写は教師がチェックする。

教室のテレビ画面にはタイマーを表示するなど、子どもが短時間に集中して取り組める工夫も行う。また、6年間、同じ時間に学校全体で一斉に取り組むため、どの子どもも習慣になっており、落ち着いた雰囲気です。午後の授業に入れるという良さもあるという。

子どもが進んで自主学習に取り組むようになるには、保護者との連携も不可欠と考えている。前述のアンケートでは、保護者から「どのように支援すればよいか分からない」という声があったため、12年度から、学校便りと

は別に、家庭学習について協力を呼び掛ける「学びの広場」を不定期に発行している。「学びの広場」では、授業内容を紹介し、保護者が子どもの学びの様子を分かるようにしたり、家庭学習のねらいや進め方などを分かりやすく発信したりしている。また、1年生の「音読カード」に書かれた保護者のコメントを、効果的な褒め方の例として「学びの広場」で紹介するなどしている。

● 取り組みの成果

地道な指導を継続し 中学生以降の力にしたい

これらの継続によって、子どもたちに家庭で自主学習に取り組む習慣が身に付きつつある。特に6年生になると、自ら発展的なテーマに取り組める子どもが増えるという。

ただし、教師たちは、点数化できる学力の向上など、目に見える成果がすぐに表れることではないと感じている。

「成果が表れるのは、中学生になってからでしょう。地道に継続することが、生涯にわたる力につながる」と信じて取り組みを続けていきます。また、自分から学びたいという気持ちは、『何のために学ぶのか』を理解することから生まれると思います。授業や自主学習の指導を通して、学ぶことの意味を考えるきっかけを与えることにも力を入れていきたいと思っています」（中西校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

本校の研究は、教務主任や研究主任が中心となり、それぞれの担任の個性や考え方を生かしながら取り組んでいます。校長の役割は、集約された成果や課題を評価し、再び先生方に戻すことであり、研究を推進するために、先生方の良い点を見つけて褒めることを心掛けています。

また、学校が更に前進できるように、地域や保護者に学校の取り組みへの理解を促し、積極的に情報を発信したいと考えています。

校長 中西恵一先生

ミドルリーダーの役割

先生方に、研究を通して期待できる成果を具体的に伝え、「だから頑張ろう」と方向付けることを大切にしています。また、さまざまな取り組みや学力調査の結果を分析し、かみ砕いて説明して、一生懸命に取り組んだ成果を実感してもらうことも、私の役割だと思っています。

日頃から、先生方の悩みを聞き、共に考え、自分の担任経験を踏まえたアドバイスをしたり、方向性を示したりするように努力しています。

教務主任 滝本律子先生

授業と授業をつなぐ家庭学習で主体的に学び続ける意欲を育む

新潟県 妙高市立妙高高原南小学校

学習に向かう姿勢はおおむね身に付いており、家庭学習習慣の定着も出来ているという妙高市立妙高高原南小学校。課題は、自ら課題を見付けようとする「意欲」が足りないことだった。子どもから主体性を引き出すことを目指し、家庭学習と授業をつなぐ指導に取り組んでいる。

取り組みのねらい

- 自分で課題を見付けて家庭学習に取り組む子どもを育てる
- 自分から工夫して考える力を付ける

取り組みの内容

- 家庭学習の課題設定を工夫することで、家庭学習と授業をつなぐ
- 自分で課題を設定して学ぶ課外の学習活動を設ける
- 家庭学習の状況を記録するノートを活用し、保護者にかかわりを促す

取り組みの成果

- 家庭学習を通して授業への意欲が高まったり、自主的に予習したりするようになった
- 自分が分からない内容に気づき、自ら課題を見付けられるようになった

● 取り組みのねらい

意欲を持って自分から学ぶ 主体性や積極性を育てたい

妙高市立妙高高原南小学校は妙高山のふもとにある学校だ。昔からスキーが盛んな地域で、冬季の体育の授業では保護者がボランティアでスキーの指導をするなど、スキーを中心に学校・家庭・地域が1つにまとまっている。熱心にスキーに取り組むため、身体能力が高い子どもが多く、また、学力調査の結果から学力の高さも明らかになっている。本間和貴校長は子どもの様子を次のように語る。「塾には通わず、学校の授業と家庭学習が

S c h o o l D a t a

◎1872(明治5)年開校。妙高山をはじめとした豊かな自然環境の中にある、単学級の小規模校。教育目標は、「進んで学ぶ子、思いやりのある子、最後までやりぬく子」。



校長 本間和貴先生

児童数 79人 学級数 6学級

所在地 〒949-2112 新潟県妙高市関川1592

TEL 0255-86-2104

URL <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/kogenminami-s/>

公開研究会 未定

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

学習の全てという子どもがほとんどで、すべきことはしっかりとやる素直な気質が学力を支えています。授業態度はとても良く、家庭学習では、低学年は30分以上、中学年は45分以上、高学年は60分以上という目標を、ほとんどの子どもが達成しています」

与えられた学習に意欲的に取り組む態度とは対照的に、自分から課題を見付けたり、工夫して考えたりする学習には消極的であることが課題だ。そのため、「自分から意欲を持って学ぶ子どもに育ってほしい」という願いを持って、校内研究に取り組んできた。

● 取り組みの内容

子どもの毎日の家庭学習状況を保護者と教師が確認する

家庭学習習慣の定着については、保護者の支援が不可欠と考え、子どもが家庭学習の状況を書き、それを保護者が確認する取り組みを長年続けてきた。以前は学校独自の書式を用いていたが、2012年度からは、中学年以上は妙高市教育委員会が市内全校に配布する「私の家庭学習ノート」を活用し、家庭学習計画、メディア視聴時間、日記などを記入している(写真)。研究主任で6学年担任の横田信子先生はこう説明する。

「子ども全員分をチェックするのは大変ですが、子どもの日記や保護者のコメントを通して、一人ひとりが家庭でどのように過ごして

何を感じているかがよく分かります。それらを生掛けや指導に生かしています」

長年の指導により、家庭学習の習慣化という目標はおおむね達成した。しかし、「自ら学ぶ内容を見付けられるような主体性までは育てていない」という、次の課題が見えてきた。

次の授業に結び付く課題を出し家庭学習の意欲を高める

そこで、11年度から、家庭学習と授業をつなぐことで子どもの自主性を引き出す指導の研究を始めた。主題は「子どもの学びをつなぐ家庭学習」の在り方を意識した授業改善」として、算数を中心教科に据えた。

「授業の内容を自分で復習したり発展させたりして、『これを使って学ぶ』という意欲

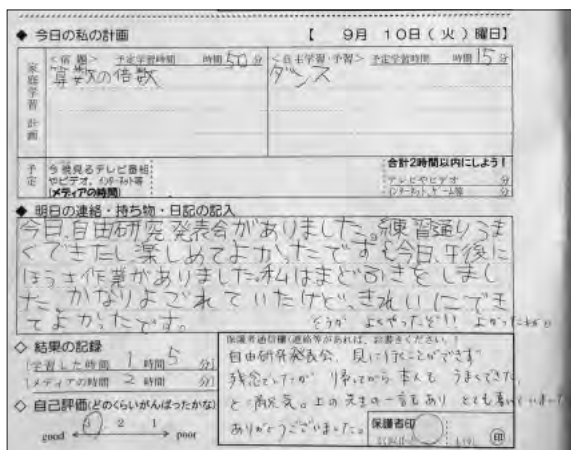


写真 「私の家庭学習ノート」は、子どもが主体的に毎日の家庭学習と向き合うことを目的としている。教師や保護者もコメントなどでそれを支える

妙高市立妙高高原南小学校校長
本間和貴 ほんま・かずたか
「子どもにも居場所や活動の場があり、『面白い！楽しい！休みたい！』と感じられる学校をつくりたい」

妙高市立妙高高原南小学校
横田信子 よした・のぶこ
研究主任。6学年担任。「二人ひとりが確かな学力を身に付け、次のステップへ自信を持って進めるようにしたい」

妙高市立妙高高原南小学校
長澤虎幸 ながさわ・とらゆき
生活指導主任。5学年担任。「ゴールに向かって、今、出来ることに取り組み、互いの成長を喜び合える日々になりたい」

を持つて次の授業に臨み、再び家庭で学びを深めるといいうように、常に学び続ける子どもを育てたいと考えています。授業で学んだことを生かせるよう、家庭学習の課題を工夫し、その家庭学習を生かした授業をつくるという視点で授業改善を図りました(横田先生)
試行錯誤の末、授業と関連付けるための家庭学習の課題を次の4つに整理した。

- ① **ヒントになるもの** 学習に使う**既習事項**などの**準備** 例えば、6年生の「円の面積」の学習では、学習に必要な平行四辺形の面積の求め方を復習する課題を出した。
- ② **個人差に対応するもの** 駅伝の**繰り上げスタートに相当** 個人差を埋めるような課題を出し、次の授業で全員が同じスタートラインに立てるようにする。例えば、1年生は数を

数える時間や精度に差があるため、授業で使うプリントを渡し、そこにある物を数える課題を出して、数えるのが速い子どもも、遅い子どもも自分のペースで準備できるようにした。授業では答えを比べることから始めた。

③ **つまづきが予想されるもの** 3年生の「小数の加法・減法」の学習では、小数点の位置をそろえて計算する場面での誤答が多くなると予想した。そこで、整数と小数の加法を比較し、相違点をまとめるという課題に取り組ませた。その日のうちに復習することにより、「位をそろえて計算する」という意識化が図られ、次時の減法の学習にスムーズにつながった。

④ **活用できるもの** 学習した事項の有用感の体感 6年生の「比」の学習では、理解を深めるために、家庭で比を使っているものを探すと課題を出した。「麵つゆ」「お父さんが飲むウイスキーの水割り」など、さまざまな答えが持ち寄せられた。

こうした家庭学習を毎時間設定するのは、学習内容や教師の負担の面で難しいが、学期に1度は必ず単元を設定して取り組んだ。その単元の指導計画には、各時間の間に「家庭学習」の欄を設け、課題を記入した(図)。

**保護者が協力しやすい内容にし
授業の様子も伝える**

家庭学習の内容は、保護者にかかわっても

3年生算数の指導計画(抜粋)

時間	ねらい	学習活動	評価基準	評価方法
1	「分ける」と「同じ数ずつ分ける」ことの意味の違いが分かり、操作を通して、等分した時の1人分の数を求める。	<ul style="list-style-type: none"> 分ける場面には、2種類の場面があることに気付く。 除法の式の表し方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法の式の表し方を理解している。(知識理解) 	<ul style="list-style-type: none"> ノート
1わり算(ア)				
2	等分除の答えを乗法九九を用いて求める。	<ul style="list-style-type: none"> 具体物や図を用いて、15÷3の簡単な答えの求め方を考える。 乗法九九で除法の答えを見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体物や図、既習乗法を用いて、除法の答えを見つけている。(考え方) 	<ul style="list-style-type: none"> ノート 机間巡視
3	等分除の問題を作る。	<ul style="list-style-type: none"> 等分除の問題を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法の式を用いると、場面を簡潔に表せるというよさに気づき、進んで問題を作ろうとしている。(関心意欲) 	<ul style="list-style-type: none"> 机間巡視 スタンプシート
家庭学習				
復習：わり算の本(等分除の問題)を作る。				

授業と授業の間に家庭学習の課題を入れて、指導計画を立てている*同校の資料から抜粋して編集部で作成

らうことを重視し、授業で習った内容を説明するなど、保護者の負担にならずに協力しやすい課題を中心としている。これにより、保護者に子どもが学校で何を習っているのかも伝えられる。例えば、1年生で繰り返りがあるたし算の方法を説明する課題を出したところ、自分の言葉で説明することで理解が格段に深まり、保護者にも好評だったという。

こうした取り組みを続けるうちに、子ども

の授業への意欲も高まっていった。「家でこんな勉強をしてきた」「今日はこれをやるんだよね」といった声が子どもから聞かれるようになったと、生活指導主任で5学年担任の長澤虎幸先生は話す。

「家庭で学んだことを授業で生かせるため、『授業で早く話したい』という気持ちが強まるといふ変化が見られました。以前に比べ、全体的に自信を持って、意欲的に授業に臨むようになっています」

「家庭学習をすると授業がよく分かる」「分かっている」と授業で活躍できる」という経験を繰り返すことで、家庭学習への意欲が高まり、自ら予習をする子どももいるという。教師の意識も大きく変化した。

「授業と授業をつなぐ課題は、次時以降の展開を踏まえて設定する必要があります。単元全体を見通して指導計画を作成するようになり、単元を通して付けたい力も明確に意識するようになりました」(横田先生)

**放課後の「チャレンジタイム」で
自分の課題を見付けて学ぶ**

自ら課題を見付ける力を育むことを目的とした、課外の学習活動にも注目したい。

同校は、以前から、昼休みや放課後に学習の理解度に応じてドリル学習や発展学習に取り組む「学びの広場」を設けている。この学習活動は保護者と子どもが相談して希望日に

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

参加する形式だが、学年が上がるにつれて忙しさを理由に消極的な子どもが増えることが課題だった。そのため、12年度は学びの広場を継続しつつ、隔週火曜日の放課後の30分間、4年生以上が全員参加する「チャレンジタイム」をスタートした。国語、算数、理科、社会の4教科が対象で、それぞれAコース（基礎）とBコース（発展）を用意し、教科やコースは子どもが選ぶ。興味深いのは、学習内容も子ども自身に決めさせることだ。

「子どもは家庭学習に意欲的にはなりませんが、何をすればよいか分からず、とりあえずドリル学習をする状況でした。そこで、チャレンジタイムでは、自分の課題を見付けることに重点を置きました」（横田先生）

チャレンジタイムでは、授業の復習をしたり、苦手な分野に取り組んだりする子どもが多い。なかなか課題を見つけれない子どもには、テストで間違えたところや苦手なところを学習するように教師が声を掛け、子どもが自分自身の課題と向き合えるようにした。課題を克服する経験を重ねることで、子どもは何を学習すべきかを次第につかんでいったという。指導には、級外職員や外部指導者も加わり、出来るだけ多くのコースを設けている。学習の始めと終わりに子どもが「振り返りカード」に記入し、担任へ提出することで、指導者と担任との情報共有も図っている。チャレンジタイムは、子どもにも好評だ。ア

ンケートには、「もつと時間を増やしてほしい」という、学びへの意欲がうかがえる声が寄せられた。そのため、13年度は教科を精選し、毎週の取り組みにした。

「『自分は何が分からないか』を自覚し、課題を見付けられるようになりました。今では自分のやりたいことを学ぶ面白さを知り、静かに集中して取り組んでいます」（長澤先生）

● 取り組みの成果

子どもの変化を踏まえて 主体性を育むノート指導を展開

12年度までの取り組みを通して、家庭学習の課題を工夫し、授業をつないで学びを深めるための指導が確立されつつある。それに伴い、家庭学習に対する子どもの姿勢も主体的なものへと変化してきた。13年度は、更に子どもの主体性を高めるために、授業中の「ノート作り」に着目して研究を進めている。

「ノートは、自分の考えを表出する場なので、主体性を育てるのに適していると考えています。学びの軌跡がよく分かるノート作りを通して、子どもの気付きを促し、意欲を高めていきたいと考えています」（本間校長）

現在は、子どもとの間で良いノートの共通理解を図っている段階だが、既に家庭学習用のノートで自分なりに工夫する姿が見られるなど成果が表れ始めており、教師は取り組みへの手応えを感じている。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

基礎・基本が身に付いていなければ、十分な活用は期待できません。そのため、毎日の授業を大事にしたいと考えています。子どもが主体的に学習に取り組めるような働き掛けを、授業研究を通して考え、常に授業改善を図っていけるような教師集団を目指しています。

本校は小規模校で教員数が少ないのですが、若手教師が多いため、出来るだけ校外研修に参加できる体制づくりを心掛けています。

校長 本間和貴先生

ミドルリーダーの役割

若手の先生方が研修を通して自信を深められる研究体制にしたいという考えで、全員に発言の機会を設けるワークショップ型研修を実施しています。校長先生をはじめとして、ベテラン、若手が対等に、授業や子どもについて語り合う研修を続けるうちに、皆が思ったことを発言できる関係が出来てきたと思います。

これからも、一人ひとりの先生が主体的に参加できるような研修を模索していきます。

研究主任 横田信子先生

タブレット端末を活用し、個々に 応じた家庭学習で意欲を伸ばす

神奈川県 川崎市立南百合丘小学校

川崎市立南百合丘小学校では、2011年度からICTの活用に関心をもち、授業だけではなく、家庭学習でもタブレット端末を中心としたICTを活用し、学力や意欲の向上につながる課題のあり方を模索している。取り組みは3年目を迎え、徐々に成果が表れ始めている。

取り組みのねらい

- 積極的に自分の力で問題を解決しようとする姿勢を育てる
- 学力の二極化に対応する

取り組みの内容

- 電子黒板や1人1台のタブレット端末などを活用した授業のあり方を検討
- タブレット端末を活用した家庭学習で、学校と家庭の学習をつなぐ
- 保護者にもICT活用の理解と協力を求める

取り組みの成果

- 自分のペースで反復学習に取り組むことで、基礎・基本の定着が進んだ
- 皆が進んで発表するようになるなど、授業中の発表活動が活発化した
- 異なる学力の子どもへのアプローチの仕方が見えてきた

● 取り組みのねらい

ICTで学校と家庭をつなぎ 新たな学びを模索

川崎市立南百合丘小学校は、東京のベッドタウンとして発展してきた川崎市麻生区の中心地にある。教育熱心な家庭が多く、中学受験をする子どもも多い。学力は全体的に高いが、二極化が進む傾向が見られるという。

子どもたちは素直で協調性があり、友人関係も良好で、校内は穏やかな雰囲気だ。半面、前向きにとらえ、チャレンジしようとすることに消極的な面が見られることもある。和田淳二校長はこう語る。

S c h o o l D a t a

◎1969(昭和44)年、川崎市立百合丘小学校から分離・独立して開校。多摩丘陵に位置し、学区にはなだらかな起伏のある住宅街が広がる。2006年度から2学期制を導入している。



校長 和田淳二先生

児童数 666人 学級数 21学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒215-0017 神奈川県川崎市麻生区王禅寺西1-26-1

TEL 044-966-6376

URL <http://www.keins.city.kawasaki.jp/2/ke210401/>

公開研究会 2013年12月5日(木)

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

「自分の力で解決するより、大人に任せたり、助けを求めたりしようとする傾向がやや見られます。生きる力を付けるためにも、自分の問題は自分で悩み、解決法を模索する経験を積ませたいと考えています」

こうした課題に対応し、社会で求められる力を育てる1つの手段として、ICTを活用した教育活動に可能性を見いだしている。

「ICTの活用によって、子どもはさまざまな情報に触れます。情報を取捨選択し、自ら活用しようとする経験を通して、社会を生きていくための大切な力が育つと考えています」(和田校長)

同校がICT活用に力を入れ始めたきっかけは、2011年度にNTTグループ「教育スクウェア×ICT」の実施対象校となったことだ。これは、ICTの活用により「新たな学びの実現」を目指したプロジェクトだ。対象は小学5年生(算数、理科、社会等)、中学生(英語)で、現在、全国11の小・中学校が参加している。同校には、教室に電子黒板とプリンタ、デジタル教科書を設置し、5年生には一人ひとりにタブレット端末1台が配布された。更に、授業計画制作ツールや授業支援システムを導入し、5年生の各家庭にもブロードバンド回線が整備されるなど、職員室・教室・家庭をつなぐICT環境が整備された。当初、教師には戸惑いがあったと、昨年度5学年主任だった、現6学年主任の谷澤伸英

先生は振り返る。

「教師は授業でICTを使って何が出来るのかと手探りの状態でしたが、子どもの関心を引くことは間違いないと感じていました。1人1台のタブレット端末は、子どもの学力や興味・関心に応じて学習意欲を高めるツールになるという思いで取り組みました」

教師の予想通り、子どもはタブレット端末に強い関心を示し、授業で使い始めると楽しんで操作し、「もっと使いたい」という声が挙がった。ICTに理解を示す保護者も多し、国嶋信教頭は話す。

「教育熱心で社会の動きに敏感な保護者が多いため、ICTや英語を『道具』として身に付けさせたいという意向を強く感じます」

● 取り組みの内容

タブレット端末を活用し 発言や理解を支援する

授業では、どのような場面でICTを活用し、子どもの学習意欲を喚起しているのか。理科では、タブレット端末で動画を見ながら、メダカの生態や雌雄の違いを学んだり、植物の生長過程を追ったり、観察を補完するツールとして活用する(P.20写真)。5学年主任の吉谷良子先生はこう説明する。

「動植物の観察は時間が掛かり、大切な瞬間を見逃すこともよくあるので、動画で重要なポイントをきちんと伝えて、関心を引き出



川崎市立南百合丘小学校校長
和田淳二 わだ・じゅんじ
「子どもの成長を願い、教職員の力を結集し、子どもが喜んで通う学校をつくりたい」



川崎市立南百合丘小学校教頭
国嶋信 くにしま・まこと
「乗り越える体験をさせて、たくましい育ちをサポートする。そのことの大切さを保護者にも伝える」



川崎市立南百合丘小学校
谷澤伸英 たにざわ・のぶひで
6学年主任。「勉強も遊びも楽しく協力して乗り越えられるように支援し、粘り強く取り組み子どもを育てたい」



川崎市立南百合丘小学校
吉谷良子 よしたに・らがこ
5学年主任。「一人では感じられない楽しさ、皆だからこそ感じられる楽しさのある学校や学級をつくる」



川崎市立南百合丘小学校
中島清香 なかじま・さやか
5学年担任。「思いやりを持って人とかわり、それぞれが認め合う居心地の良いクラスをつくる」



川崎市立南百合丘小学校
田口祥 たぐち・しゅう
5学年担任。「子どもたちが学び合ったりかわり合ったりして、慣れ合いではなく高め合える学級をつくる」

しています。紙の資料よりも、動画は印象深く、記憶に残りやすいことも利点です」

学び合いでICTを活用することも多い。特に発表活動を深めやすくなったと、5学年



写真 5年生のICTを活用した授業。オモチャカボチャの花粉を顕微鏡で観察後、タブレット端末で花粉の性質を説明する動画を視聴して理解を深めた

担任の田口祥先生が話す。

「1人の考えを全体に広げるために、以前は早く問題を解けた子どもにもホワイトボードに書いてもらっていましたが、今は書画カメラでノートを映しながら発表しています。ホワイトボードよりも見やすく、発表者が偏らないという良さもあります。以前より多くの子どもが自信を持って話し合いに参加するようになりました」

ドリル、調べ学習、素材の撮影 1台で家庭学習の幅が広がる

タブレット端末によって、授業と家庭学習の動機付けも高められた。同校では、家庭学習は主に復習を課し、授業内容の定着を図っている。通塾率が高いため、負担になりすぎ

ないように課題を設定しているが、塾に通わない子どもの保護者から「もっと出してほしい」という要望を受けることもある。

毎日の家庭学習の課題を個々に設定するのは難しいが、タブレット端末によって子どもの意欲や学習進度の差に対応しやすくなった。例えば、夏休みの課題に1問1答式のデジタルドリルを課したが、これは課題が終わるとチャレンジ問題が出される。この機能を活用し、自主的に先に進む子どももいた。また、正解するとキャラクターが成長する機能もあり、それも家庭学習の動機付けになっていると、5学年担任の中島清香さやか先生がいう。

「デジタルドリルは同じ問題に何回も取り組めます。子どもはキャラクターを成長させようと、繰り返し取り組みたくなります。間違えた問題だけが出される機能も、子どもの意欲を刺激しているようです。問題を解けるようになる楽しさが、次の学習のベースになっている姿が見られます」

また、動画や画像を記録する機能は、授業と家庭学習をつなぐ課題を設定しやすい。

家庭科では、自分が作った朝食をタブレット端末のカメラで撮影する課題を出し、授業で発表した。以前は絵を描いて行っていた活動で、絵が苦手な子どもは発表に消極的だったが、写真を使うことで発表が活発になった。同様に、学級活動の時間では、家族やペットなどを撮影して、家庭での生活についてプレ

ゼンテーションを行った。今年の夏休みには、雲の形を撮影する課題を出した。夏休み明けの気象の授業で活用する予定だ。自分が写した写真と気象の現象を結び付けて考えることで、意欲や理解を深めることがねらいだ。

プロジェクトによって各家庭のインターネット環境が整備されたため、調べ学習も課題に出すことがある。例えば、社会で自動車工業を学習する授業の前に、自動車会社のホームページを閲覧する課題を出した。家庭で準備することで、自信を持って授業に臨む姿が見られ、また、あらかじめ予習をすることで、授業をテンポよく進められることにもつながっている。

このように、ICTを活用した家庭学習を取り入れ、子どもの意欲向上や授業のねらいに効果的な活用法を探っている。

こうした授業づくり、家庭学習の課題設定を進める上でICT支援員の支援が欠かせないと、和田校長は強調する。

「教師はICTの全てを知っているわけではありません。『子どもにこんな力を付けた』という教師の希望に、ICT支援員から提案をいただけるのは、本当にありがたいサポートの必要性を痛感しています」

ICT活用は、保護者の理解を促しながら進めることも大切だ。ICTの重要性を認める保護者が多いが、やはり、タブレット端末の必要性を疑問視したり、ゲームのようなイ

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

メッセージを持つたりする保護者もいる。

「これから必要となる力であることを説明し、情報モラルに関する不安にも対応しながら、保護者に理解を求めています」（和田校長）
 「連続1時間以内」と使用時間を設定して周知するなど、ルールづくりも進めている。

●取り組みの成果

個々の学力・理解度に合わせて進めることが意欲につながる

試行段階ではあるが、これまでの取り組みから教師はさまざまな成果を感じている。

まずドリル学習に何回も取り組めるなど、タブレット端末は、基礎・基本の定着に向いていることを実感した。

「自分のペースで進められるため、家庭学習にも適していると感じました。自分でどんな先に進む子どももいれば、間違えた問題に繰り返し取り組み、定着を図る子どももいます。進度と意欲に応じた対応が出来るのがICTの良さだと思いました」（中島先生）
 授業中の発表や話し合いが活発化したことも大きな変化だ。

「言葉だけでは上手に説明できない子どもも、タブレット端末を使うことで発表しやすくなります。『皆が理解してくれた』と実感して、発表することに自信を付けた子どももいます」（吉谷先生）

課題である学力の二極化への対応という点

でも可能性を感じている。

「理解が早い子どもは、ICTを活用してより分かりやすい発表の方法を考え、表現の幅を広げていきます。理解が遅めの子どもは、可視化された分かりやすい発表を聞くことが理解の助けになります。このように、ICTは一人ひとりのハードルに応じて意欲を引き出し、学習をサポートできるツールだと思います」（田口先生）

学校全体で取り組みを進めるために、他学年の教師も子どもの変容を見たり、校内研修で情報を共有したりしている。特に、学習意欲の面で大きな成果が見られたことから、「ICTを使ってみたい」という教師が増えていく。更に子どもからも「もっと使ってみたい」という声が出たため、当初は5年生のみの計画だったが、6年生も継続することにした。

一方で、従来のノートやプリントが適している学習活動があることにも気付いた。例えば、ICTは正誤の判定がすぐに出るため、誰がどの問題でつまづいたかが分かりやすい半面、思考のプロセスが残らず、「どこまで理解しているか」ということが見えにくい。理解度を把握したい時は、ノートに考えの軌跡を残させる指導が必要だと考えている。
 同校では、授業と家庭学習をつなぐ際にも、こうしたICTの性質を見極めて紙の教材と併用しながら、意欲的に学びに向かう子どもを育てたいと考えている。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師それぞれに得意・不得意があるものです。若手教師も十分に力を発揮できるように、学校全体がチームとして取り組むことを大切にしています。

ICTは、実際に教師自身が使う中でどのような指導で効果的に活用できるのかが見付かるのだと思います。研修会を行い、教師個々のスキルアップを支援することが必要です。そのような機会を増やすことで、仲間同士が助言し合う関係をつくりたいと考えています。

校長 和田淳二先生

ミドルリーダーの役割

本校ではICTを活用した取り組みは高学年のみですが、研修などを積極的に実施して、先生から先生へとノウハウや成果をつなぎ、全校に広げていきたいと考えています。

ICTは、機器の操作に慣れることがとても重要です。若い先生の方が操作に長けていることも多いため、周囲のアドバイスに耳を傾けてスキルを身に付け、いい形で授業に組み込んでいきたいと考えています。

5学年主任 吉谷良子先生

家庭学習を習慣化することので育つ 「自己マネジメント力」を生涯の宝に

早稲田大教職大学院教授 田中博之

なぜ、今、家庭学習が改めて注目されているのか。早稲田大教職大学院の田中博之教授が、家庭学習が学力向上に結び付くメカニズムを分かりやすく解説し、今後の家庭学習指導のあり方を提示する。

●家庭学習が注目される理由

社会や家庭環境の変化により 家庭学習がますます重要に

学力向上のキーワードとして、家庭学習が改めて注目されています。もちろん、昔から家庭学習は重視されてきましたが、近年、子どもをめぐる環境の変化に伴って、家庭学習のあり方を再考する必要が生じています。

2003・06年のいわゆるPISAショックでは、日本の子どもの読解力の低さが指摘されました。新課程への移行により、活用力を育む授業が増えていますが、ただ授業を受けて身で聞くだけでは学力がなかなか高まらない状況を踏まえ、家庭学習に目が向けられて

いるのです。

家庭学習指導の見直しが求められる理由の1つに家庭環境の変化があります。今は保護者がテレビやスマートフォン、ゲームなどを頻繁に使い、新聞や本を読まなくなっています。この状況は、子どもにも波及し、学びに向かいにくい環境になってきています。

保護者の宿題に対する考え方の変化を、肌で感じている先生方も多いでしょう。共働き家庭の増加などもあって、保護者が支援しなければならぬような宿題は好まれない傾向が見られます。また、塾の宿題をする時間のために、学校の宿題を減らすように要望する保護者もいます。

こうした状況の変化に、小学校も対応して

きました。「家庭学習の手引き」などを始めとした保護者への働き掛けにより、子どもたちも「早寝早起き朝ごはん」「宿題はきちんとやる」という意識が高まっています。更に、「家庭学習ノート」の取り組みが全国に広がるなど、家庭学習指導にも変化が見られます。しかし、家庭学習にはまだ改善の余地があります。「宿題には取り組んでも、『自ら学ぶ家庭学習』はしない」という子どもが多数である状況を変えなくてはなりません。

私も監修にかかわった『学力向上のための基本調査2008』（ベネッセ教育総合研究所）でも、「テレビやラジオをつけないで集中して学習を行っている」「宿題を期日までやり遂げる」「得意分野をさらに伸ばすた

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす



たなか・ひろゆき◎大阪大
大学院人間科学研究科博士
後期課程中退。大阪教育大
教授を経て、2009年4
月より現職。文部科学省「全
国学力・学習状況調査」の分
析・活用の推進に関する専
門家検討会議「委員も務め
る。著書に、『学級力向上
プロジェクト』（金子書房）な
ど。

めに自主的な学習を行っている」など、基本的な生活習慣や学習習慣が達成できている子どもほど、学力が高いというデータが出ています。いずれも特別な内容ではありませんが、現状は十分に達成されているとはいえません。

●家庭学習指導のポイント

フィニランドの指導に学ぶが 活用学習を深める宿題

こうした課題を踏まえ、家庭学習を学力向上に効果的に結び付ける指導について考えていきたいと思います。

前提として、家庭学習と授業の内容をリンクさせなければ、学力は十分に高まりません。両者のリンクにより、大きく分けて、①基礎・

基本の定着、②活用型学力の育成、③自己マネジメント力の育成が期待されます。

①は、ドリル学習などによって促されるもので、いわば従来型の宿題といえます。②に關してというと、授業では活用型の学習が徐々に増えていますが、家庭学習とはうまくリンクされていません。そして、③はほとんど手が付けられていない状況といえるでしょう。

①は既に多くの学校が取り組んでいますので、②活用型学力の育成から説明します。

新課程への移行に伴い、各教科で言語活動を軸とした活用型学力の育成が進められています。例を挙げれば、国語では、読解して終わるのではなく、実際に物語や説明文を書いたり説明したり、思考や表現をする学習が取

り入れられるようになりました。

こうした活用学習が抱える大きな課題が、授業だけでは時間が足りないことです。そのため、「調べ、考え、書く」を中心とした活用型宿題によって補完する必要があると考えています。活用型宿題が一般的なフィニランドの算数の指導例を紹介します。

私が現地で視察した2年生のクラス（年齢的には日本の3年生）では、子どもが作問をする宿題が出されていました。自分で問題をつくる学習は、理解を深めると共に、思考力や表現力を高める効果が期待できます。

ある子どもは、「ペットショップで30ユーロの犬2匹、20ユーロの猫2匹を買いました。払ったお金はいくら？」という問題を、文章と絵で表しました。授業ではこうした問題を発表し合い、クラスみんなで式や答えを考えます。

ユニークな発想だと感心したのが、ある子どもの「てんとう虫が10匹、クモが5匹、ヘビが10匹、歩いてきました。全部で足は何本？」という問題です。ヘビは足がないので、0本として計算します。これには先生も児童も面白がり、授業が大変盛り上がりました。

フィニランドは、日本より授業時間数が限られていますが、こうした宿題に活用学習の「エクササイズ」としての働きを持たせることで、協同して考える喜びを生み出し、豊かな学びを成立させています。

「総合的な学習の時間」を使い 自己マネジメント力を育てたい

次に、③自己マネジメント力の育成の説明をします。自己マネジメントとは、子どもが自分の学習と生活の実態を自覚して、目標を設定したり、進捗状況を記録したりして、自己学習を改善していくことです。「教師」というペースメーカーがいない環境で、自分で学習計画を作成・実行し、振り返ったり、学習姿勢や生活態度などの自己点検を繰り返したりすることで、次第に自分をマネジメントして成長していく力が育ちます。こうした力は生涯にわたる宝になります。自己点検を日常的に取り入れることを強く提案します。

ただし、自己マネジメント力は、子どもに任せているだけでは育ちません。私は、図1のようなチェックリストを用いて、「総合的な学習の時間」の10時間程を使って取り組むことを提案します。グループ活動による相互評価を取り入れると、自分を見つめ直したり、友だちと認め合ったりする機会になりますし、先生がチェックする負担も軽減されます。

自己マネジメント力の育成では、発達段階に応じた指導方法に留意してください。指導が丁寧なのは良いのですが、お膳立てしすぎると主体性が育ちにくいことがあります。

低学年は、先生に促されて取り組むうちに自分のものとして獲得していく時期ですか

図1 家庭学習力の自己点検チェックリスト

家庭学習力アンケート		年 級 名
		名前
		年 月
<p>◎ このアンケートは、自分の家庭学習をよりよくするために、自分の家での勉強や生活のよさをふり返るものです。それぞれの項目の4～1の数字のあてはまるところに、一つずつ○をつけましょう。学校の成績とは関係ありませんから、ありのままを答えてください。</p> <p>4 ともあてはまる 3 少しあてはまる 2 あまりあてはまらない 1 まったくあてはまらない</p>		
学習習慣（大切な学習を、こつこつ続ける力）		
①宿題	学校の宿題を全部やりとげて、提出日に先生に出しています。	4-3-2-1
②習慣	家庭学習の時間と内容を決めて、毎日こつこつと取り組んでいます。	4-3-2-1
③復習	学校の授業で学んだことを、家に帰ってから復習しています。	4-3-2-1
生活習慣（規則正しく健康な生活をする力）		
④時間	一日にテレビを見る時間や、ゲームやメールをする時間を決めています。	4-3-2-1
⑤睡眠	毎日、早寝早起きをしています。	4-3-2-1
⑥食事	毎日ほとんど同じ時刻に、朝ご飯と晩ご飯を食べています。	4-3-2-1
自律心（自分から進んでとりくむ力）		
⑦準備	次の日の授業に必要な教科書やノートなどは前の日の夜に、自分で準備しています。	4-3-2-1
⑧整理	家では学習をしている場所を整理し、いらぬものはかたづけしています。	4-3-2-1
⑨自律	学校の先生やお家の人にいわれなくても、自分から進んで家庭学習をしています。	4-3-2-1
⑩計画	自分の家庭学習で、できているところとできていないところのわががたがわががたしています。	4-3-2-1
⑪目標	自分の得意なことを伸ばすために、目標のほかに自分から進んで家で学習しています。	4-3-2-1
⑫夢	得意やりたい仕事や行きたい学校の夢をもって、家で学習をしています。	4-3-2-1

田中先生作成の家庭学習力アンケート。2枚目には自己学習力、自己コントロール力、自己マネジメント力、生涯学習力、自己成長力があり、各3項目をチェックする。

*アンケートはベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます
<http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報誌（小学校向け）

ら、自己マネジメント力よりも、「宿題をきちんとやる」「字は丁寧に書く」「姿勢を正しく」「発表は大きな声で」といった基本的な学習姿勢の育成に努めるとよいでしょう。

中学年から、自己マネジメント力の指導を徐々に取り入れられます。3年生は計画性や自分を振り返る力が十分に育っていませんから、保護者の協力を得ながら進めます。すぐに効果は表れませんが、じわじわと力を伸ばす気持で取り組んでください。

高学年になると、自己点検は大切だと理解しながら、それを面倒だと感じる子どもが現れます。ですので、こうした活動を純粋に「楽

しい」と感じる中学年から始めることで、子どもは自己点検が将来必要な力であることをよく理解して前向きに取り組めるでしょう。

更に進めて、中学校でも取り組みを共有したいところです。小中連携のねらいの1つは、9カ年を通して家庭学習力を育てることだと、私は考えています。

● 保護者への働き掛け 家庭学習を支援する 保護者の3つの教育的機能

家庭学習の効果を高めるためには、子どもの応援者である保護者の支援が欠かせませ

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

ん。家庭学習を支える保護者の教育的機能には、「ペースメーカー」「サポーター」「ファシリテーター」の3つがあります。

ペースメーカーは、学習を促したり、生活環境を整えたりすることで、規則正しい学習や生活の習慣形成を支援することです。サポーターは、子どもが学習から逃げたくなったり、自信をなくしたりした時に、アドバイスしたり話し相手になったりして、心の支えになることです。また、ファシリテーターは、教材の準備や学習スペースの確保、静寂な時間の保障などの条件整備を通して、良好な学習環境を構成することです。

保護者に働き掛ける際は、以上の3つを分かりやすく説明するとよいでしょう。入学時にしっかりとお願いして、小学生の保護者としての自覚を促すと効果的です。

●学校にしかできないこと

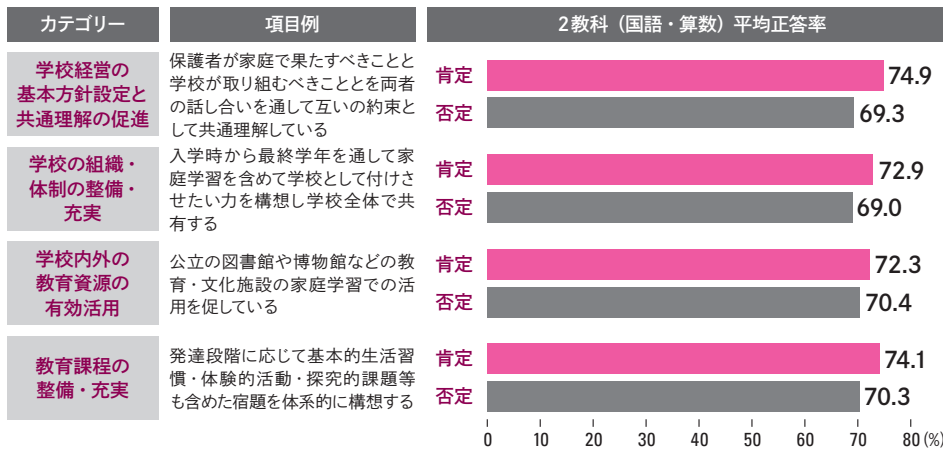
「自覚を促す」「自分で自律性や自主性が高まる」

家庭学習は、家庭に任せられる部分が多く、また学習指導要領で指導法が明示されているものでもないため、価値観をしっかりと持たないと取り組みが揺らいでしまいます。また、保護者は、学級や学年による指導のばらつきに不安を感じます。そのため、家庭学習指導は、校長先生のリーダーシップの下、学校として統一的な基準を設けて取り組んでくださ

い。校長先生が「家庭学習の充実」に取り組んでいる学校ほど教科学力が高いという調査結果もあります(図2)。

これまで話してきたように、家庭学習のねらいは基礎・基本の習熟にとどまらず、授業とリンクさせて教育効果を高めたり、自己マネジメント力を育てたりすることにありま

図2 「家庭学習の充実の取り組み」項目の校長による肯定・否定と子どもの教科学力との関係(小学校)



出典/ベネッセ教育総合研究所「学力向上のための基本調査 2008」

特集取材を終えて

家庭学習の時間は増えているが、質はどうか。これが今回の特集テーマの出発点です。先生方の声からは、反復練習が中心である宿題の内容にもう一步踏み込みたいけれど、家庭の考えもあるので手を付けにくいという様子がかがえました。取材した各校で共通に挙げられた課題は、宿題には取り組むが、自分でもっと学ぶ「意欲」がないという子どもの姿でした。学ぶ意欲を伸ばすために生活習慣の確立や基礎・基本の習熟は欠かせず、小学校でも熱心にご指導されていると思います。今後はそれらに加え、例えば「自学ノート」や「自己チェック」など、より自らの気付きを促すような家庭学習指導の工夫が求められるように感じました。

VIEW21 小学版編集長 杉田美穂

す。そのような観点から、学校においても家庭での学習の仕方や意欲の持ち方などを教えていくことが、小学校教師の大切な役割です。これからの社会を生きていく上で、自己マネジメント力は極めて重要な力となります。保護者にも、「勉強だけ出来ればよい」のではなく、深い愛情の下に必要な場面では厳しく接して、子どもの自律性や自主性を高めるように、学校からよく伝えてください。自己マネジメント力は、強制して育つものではありません。前述した自己点検チェックリストのように、「自覚を促す」「気付かせる」といった視点から、子どもの心に働き掛ける指導を進めていただきたいと思います。

昨年12月のある朝8時。多摩市立南鶴牧小学校の5年生が待ちに待ったアートマイルプロジェクトの交流校、カナダのValley View Elementary Schoolとのテレビ会議による交流会が始まった(写真1)。

「Tanabata is a traditional event of Japan.」と、日本の子どもが飾り付けをした笹と、織姫と彦星の紙芝居を紹介すると、テレビ画面から「Wow!」と歓声が聞こえ、

拍手が沸き起こる。一方、カナダの子どもが町で熊が捕獲された新聞記事や校庭にガゼルという野生動物が来た写真を見せると、「えーっ」と日本の子どもが驚く。互いに自分たちの文化や生活の様子を伝え、最後に日本の子どもが半分描いた絵を披露し、1時間はあっという間に終わった。

「カナダ人は特別な存在ではないと、子どもは肌で感じたのでしょうか。感想文に『大

陸も、生活の仕方でも違うけれど、僕たちと同じだと思ふことがいっぱいありました」と書く子どももいました」と担任の小辻裕美子先生は言う。カナダ・バンクーバーとの時差は17時間。日本の朝8時は現地では前日の15時だが、子どもにとって、その距離が一気に縮まった1時間だった。

外国の同世代と協働する原体験を

アートマイルとは、大型の絵の制作を通じて海外の子どもたちと協働する体験をさせようという世界的なプロジェクトで、日本での活動を支援する「ジャパンアートマイル(JAM)」は2005年に発足した。南鶴牧小学校は11年度から参加。その理由を吉田正行校長は、「グローバル化が進み、日本においても海外の人と協働して物事を進める場面が、今後ますます増えると思います。文化的背景や価値観の異なる世界の同世代の子どもと生身の交流をすることで、人種や外見などで人を判断するのではなく、実際にかかわることの大切さを実感してほしいと考えました」と説明する。

同校では毎年、5年生が参加。主に「総合的な学習の時間」に次の手順で活動を進める。1学期は、外国語活動の時間に英語でのあいさつや自己紹介などを学び、また交流したい国を挙げ、外国へのイメージを膨らませる。8月に交流先が決まると、9

絵の制作を通じた交流で グローバル意識を育む

東京都多摩市立南鶴牧小学校

2013年5月、教育再生実行会議の第3次提言に、小学校英語を教科化することが盛り込まれた。急速に進むグローバル化を背景に、義務教育段階からグローバル人材を育成する環境を整えようという動きが顕著に見られる。

今号は、大型の絵を協働制作することで

海外の子どもたちとの交流を深める事例を通して、グローバル教育について考える。

School Data



東京都多摩市立南鶴牧小学校

◎ 1982(昭和57)年開校。約5000㎡の校庭芝生、ビオトープ、屋上の太陽光発電などを生かした環境教育、植物栽培や動物の飼育などを通じた人権教育を基盤としたESD(*)を推進。

校長 吉田正行先生 / 児童数 530人 / 学級数 20学級(うち特別支援学級4) / 所在地

〒206-0034 東京都多摩市鶴牧5-43 /

TEL 042-372-1860

URL <http://www.tama.ed.jp/s-tsuru/>

* Education for Sustainable Development の略。持続可能な開発のための教育のこと



多摩市立南鶴牧小学校校長

よしだ・まさゆき 「子どもたちにたくさんの良質な原体験をさせたい」



多摩市立南鶴牧小学校

あぶかわ・がく 生活指導主任。6学年担任。「相手の良いところを見付け、良い人間関係を築く力を育てたい」

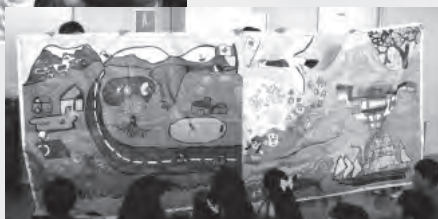


多摩市立南鶴牧小学校

こじま・ゆみこ 研究主任。6学年担任。「子どもたちが失敗から学び、次に生かそうとする気持ちを育てたい」



上/写真1 交流校とのテレビ会議で、七夕の飾り付けを実演 右/写真2 協働で描いた絵。左がカナダ、右が日本で、内容は両校が話し合って決める。日本の鶴に対してカナダはグース、桜に対して楓など、代表的な文化や自然を表現



月からは、定期的に自己紹介文と写真を交流先に郵送したり、電子フォラムにアップしたりして、子どもたちが互いに自分や学校のこと、地域や国を紹介し合う。更に、12月にはテレビ会議を開き、子ども同士が直接交流する。これらの活動と並行して、同校の子どもがキャンパス(縦1.5m×横3.6m)の半分に絵を描き、交流先に郵送。交流先が残り半分を描いて完成させたら、返送される(写真2)。交流校は11年度はパキスタン、12年度はカナダだった。

6学年担任の虻川^{あぶかわ}学先生は、昨年度のカナダとの交流を振り返ってこう話す。

「目的が明確なため

か、自分のことを相手にきちんと伝えたいという姿勢が子どもに強くあり、自己紹介の英文を書く際にも辞書を引き、A・L・Tに質問するなど、自ら意欲的に取り組む姿が数多く見られました」

冒頭で紹介した七夕の飾り付けの実演や紙芝居などは、子どもたちのアイデアだ。

「子どもたちは言葉で伝えられないなら、他のことで伝えようと言い、テレビ会議では、他にも浴衣を着たり、歌を歌ったりとさまざまな工夫をしていました。自分たちでより良い方法を考え、創造力を発揮する姿に頼もしさを感じました」(吉田校長)

自国である日本や、他の国への好奇心、そして英語学習への意欲も高まっている。

「相手に伝えるために調べた日本の文化や自然ですが、自分の国を深く知ってよかったという声も多く上がりました。他の国とも交流したい、もっと英語を学びたいと言う子どももいます」(虻川先生)

同じ部分を感じて、距離が縮まる

最初は相手の国について何も知らなかった子どもが、交流を始めて、まず相手の国との違いを感じ、日本を再認識し、更に、直接話すという相手の息遣いを感じられる交流をすることで、自分と同じ部分を感じ取る。どんどん変化する子どもを目の当たりにし、経験を伴う活動の重要性を感じた

と教師は口をそろえる。

「パキスタンとの交流時に、『紛争のイメージがあり、怖いと思っていたが、勝手なイメージで決め付けずに、その国のことをよく知ろうと思った』と書いた子どもがいました。そう気付いた子どもがいたことをうれしく思いました」(吉田校長)

「どの国の人も自分と同じ人間だと実感することは平和にもつながるでしょう。そういう意味で、国際交流は互いの距離を縮める手段でもあると思います」(小辻先生)

グローバルに活躍する人材を育てるために小学校教育で何が出来るのか。その1つ^①の答えが同校の取り組みにある。

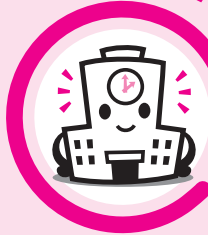
これからの教育に生かせる視点

◎外国や外国の子どもをリアルに感じ、多様な価値観に触れることは、外国語を使ってこそできる貴重な原体験です。正解を出すための知識習得学習と異なり、絵の制作や日本の紹介活動などを通して、伝えたいことを考え、判断し、表現することで「グローバルな視野を持つて自ら考えて行動する力」が育ちます。

「子どもは場を与えれば、どんどん考えられるようになる」という吉田校長の言葉が印象的でした。

ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室
主任研究員 加藤由美子

つながる



学校と家庭の学び

学習習慣定着と授業研究に 小中が連携して取り組む

佐賀県伊万里市立南波多小学校

伊万里市立南波多小学校では、子どもの生活・学習習慣を整えようと、隣接する同市立南波多中学校と力を合わせ、子どもが1日をどのように過ごすかを自分で決める「生活スケジュール表」など、さまざまな取り組みを行っている。小中が連携して協力を呼び掛けかけた結果、家庭での声掛けも増え、規則正しい生活を送る子どもが増えているという。

帰宅後のスケジュールを 子どもが自分で作成し実践

伊万里市南波多地区は1小1中で、伊万里市立南波多小学校のほとんどの卒業生は、同校から50メートルほどの距離にある伊万里市立南波多中学校に進学する。2006年度、両校は伊万里市教育委員会から小中連携教育研究校に指定されたのをきっかけに、授業や行事などに合同で取り組むなど、交流を深めるようになった。月1回、小中連絡協議会を開き、子どもの生活や学習状況について話し

合う。また、保護者に取り組みのねらいや子どもの様子を伝えるためのパンフレット「連携読本」も、共同で作成・配布している。

小柳伸博校長は、中学校と連携する意義を次のように説明する。

「小・中学校の教師が共通の方針の下で力を合わせ、子どもの可能性を引き出したいと考えました。現在は学習習慣と授業研究の部会に分かれて研究を進め、子どもの学力向上と生活・学習習慣の定着を図っています」
学習習慣部会の活動の1つに、「生活スケジュール表」(図1)がある。こ

れは、下校後の時間をどのように使うか、子どもが自分で予定を立てるためのものだ。自主学習時間や就寝時刻などを書き、家庭に持ち帰って居間などの家族が集まる場所に貼る。

小学生の場合、まず1学期に作り、実行できなかつた反省やもつと頑張りたいことなどを踏まえ、2学期、3学期に修正版を作る。いずれも保護者と担任が内容を確認する。

修正版を作る際には、「生活スケジュール表」でなかなか守れないところに関して、「21時以降はテレビを見ない」「22時までには必ず布団に入る」とい

うように、保護者と子どもとの間で約束事を1つ決めてもらっている。5学年担任で特別活動主任の吉富和香子先生は、次のように話す。

「規則正しい生活の習慣化には、家庭でもこまめに声を掛けてもらうことが重要です。子どもが自分で決めたスケジュールを意識できるように具体的な約束をしてほしいと、生活・学習習慣部会だよりで例を示しています」

合同授業参観で保護者にも 乗り入れ授業の様子を伝える

授業研究部会の活動では、中学校

図1 「生活スケジュール表」(高学年用)

南小っ子 生活スケジュール表 五年 名前										
パターンA どんな日? → 何も予定がない日										
4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時
	宿題									保護者印
パターンB どんな日? → 習字がある日										
4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時
	宿題	準備	習字							保護者印
パターンC どんな日? → ピアノがある日										
4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時
ピアノ		宿題	準備							保護者印

習字がある日、ピアノがある日、塾がある日というように、複数の習い事をしている子どもが必要に応じて計画を立てられるように、1枚に3通りの生活スケジュールを書けるようにしている。長期休業中もしっかりと生活リズムを維持できるように、7月には夏休み専用の「生活スケジュール表」も作成する。南波多中学校では、これに学習面を強化させ、テスト計画表も兼ねたものを活用している

*同校の資料をそのまま掲載

の教師が小学生を、小学校の教師が中学生を教える「乗り入れ授業」(P.30図2)を積極的に行っている。中尾聡彦^{あきひこ}教頭は、この意義を次のよう

に話す。「中学校入学は、子どもにとつて大きな環境の変化となります。小学生のうちから中学校にどのような教師がいるのかを知り、更に中学生になっても、自分がよく知っている小学校の教師による授業があれば、子どもは安心して学習に取り組めるでしょう。いわゆる中一ギャップを感じることもしなくなると考えています」

13年度の取り組みを見てみよう。中学校から音楽、書写、英語の教科担当を招き、6年生の音楽、5年生の書写、5・6年生の外国語活動の授業を毎時間担当してもらっている。外国語活動は担任と2人で行うが、音楽と書写は中学校の教師1人で行う。

小学校からは教務主任の西伸吾先生が中学校へ行き、週4コマある1年生の数学の授業を全て教科担当と2人で指導している。「中学校の学習内容を教えていると、『小学校段階でこの単元・分野をもっとしっかり指導すべきだった』と感じることがあります。その気付きは小学校に戻って先生方と共有し、授業改善に役立てています」(西先生)

「5年生の書写の授業を見学に行ったときは、字の形や姿勢などの指導がより具体的であることに驚きました。最初と最後に書いた紙を取っておいて見比べさせるという指導も、子どもに進歩を自覚させるといふ面で大変効果があると参考になりました」(吉富先生)

他にも、単元によって中学校教師がイベント的に授業をする場合もある。例えば5・6年生の理科では、夏休み前の授業で実験してもらい、自由研究の参考になるようにした。「授業を通して中学校の教師の様

また、毎年6月、両校が同日に行う合同授業参観では、小中連携の様子を保護者に伝えるために、「乗り入れ授業」を1コマ以上行うようにしている。13年度、小学校では6年生の音楽の授業を参観してもらった。

佐賀県伊万里市立南波多小学校

◎1996(平成8)年開校。佐賀県西部、ブドウ畑や梨畑が広がる田園地帯に位置する。南波多中学校と共通の教育目標として、「ふるさとを愛し、志をもつ児童生徒の育成」を掲げている。毎月発行する学校だよりを校区内の全戸に配布し、運動会やコンサートなどの行事に参加を呼び掛けるなど、地域との連携も重視している。

校長 小柳伸博先生
児童数 147人
学級数 7学級(うち特別支援学級1)
所在地 〒848-0007 佐賀県伊万里市南波多町井手野 3100
TEL 0955-24-2007
URL <http://www2.saga-ed.jp/school/edq14308/>



伊万里市立南波多小学校校長

小柳伸博

こやなぎ・のぶひろ

「子どもと間近に触れ合っ
て一人ひとりの実態を把握
し、学校運営に生かしたい」



伊万里市立南波多小学校教頭

中尾聡彦

なかお・あきひこ

「子どもが安心して学ぶこと
ができ、楽しい時間を過ご
せる学校をつくりたい」



伊万里市立南波多小学校

西伸吾

にし・しんご

教務主任。「中学校の先生方
と密接に連絡し合い、小中
連携を推進していきたい」



伊万里市立南波多小学校

吉富和香子

よしとみ・わかこ

5学年担任・特別活動主任。
「常に笑顔で子どもと接し、
学が楽しさを伝えたい」

図2 乗り入れ授業の様子(「連携読本」より)



「連携読本」は小中連携を始めて6年目の2011年度に作成した、保護者向けの10ページの冊子。両校が力を合わせて育てようとする子ども像、そのために取り組んでいる活動などを写真付きで紹介している。「乗り入れ授業」を紹介するページもある

*同校の資料の一部を掲載

子を知ることが出来ますから、保護者は安心して子どもを中学校に送り出せるようになると思います。また、中学校の教師にとっては、進学してくる子どもの保護者と顔見知りになる機会になっていくようです」(西先生)

「乗り入れ授業」によって、両校

の教師のつながりは強くなっていると、中尾教頭は話す。

「連携を始めた当初は、互いに意識の違いや文化の違いがあり、分かり合えるかという不安がありました。けれども、取り組みを粘り強く続けることによって、小学校の教師は中

学校の教師から専門性の高い指導を、中学校の教師は小学校の教師から子ども一人ひとりを見取るきめ細かな指導を、互いに学び合うようになりました。共に子どもを伸ばそうと考えられるようになったからこそ変化だと思っています」

両校の親睦会では、小中の教師が交じり合って座り、子どもについて語り合っているという。

家庭での声掛けにより生活・学習習慣が定着

小中連携に取り組み始めて7年が経ち、ほとんどの卒業生が早期に中学校生活になじめるようになった。

規則正しく生活できる子どもも多くなっている。子どもへのアンケート調査で、「登校する1時間前には起きる」「決まった時刻に寝る」という回答がどの学年でも7割前後に達した。学習習慣も定着しつつあり、

全学年平均で「テレビやゲームの前に宿題を済ませる」という子どもは8割以上、「毎日、時間を決めて学習している」という子どもは7割近くを占める。学校の指導だけでなく、家庭での声掛けが増えたことが実を結んでいると、吉富先生は話す。

「『食事や就寝・起床の時刻などについて子どもとよく話すようになった』という保護者の声をよく聞くようになりました。学習時間をもっと増やせるよう、時間の使い方をアドバイスする保護者もいるようです」

小中連携に対する保護者の理解も深まっている。中学校と合同で行う「ふれあいコンサート」には、毎年、椅子が足りなくなるほど多くの保護者と地域の方が出席する。この町で育っていく子どもたちが真剣に取り組み姿を間近で見られる機会だと、大変多くの人が楽しみにしている。小柳校長は、今後について次のように話す。

「9年間を掛けて子どもを見取るという意識が両校の先生方に浸透してきました。今後は小中一貫校化を目指し、今まで以上に連携を強められるように、先生方や保護者と協力していきたいと考えています」

中学につながる「学ぶ意欲」を育み、 中学準備や学習法が分かる 6年生向け副教材を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2012年度は、のべ約15,000校から約160万冊ものお申し込みをいただきました。2013年度は、6年生の児童向けに、キャリア教育の授業で自分の将来について考え、中学以降につながる「学ぶ意欲」と「自分でできる自信」を育むサポートをします。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、お申し込みを受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクト ホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

未来に進むちからを育むプロジェクト。

ベネッセの学び応援

事前予約
締め切り

2013年

12/20

金

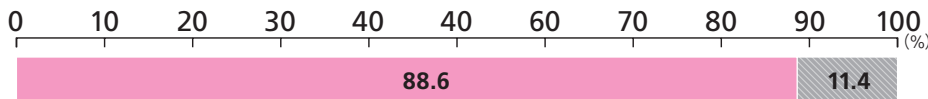


学習は難しくなったが、中学校生活は楽しい

中学校の学習 (回答:中学生)

中学1年生の時、苦手と感じるようになった教科はあるか

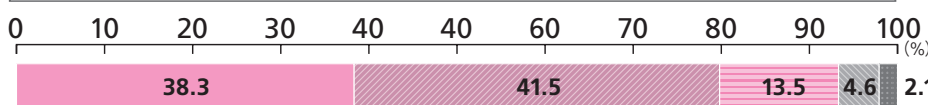
ある ない



中学校生活の印象 (回答:中学生)

中学校は楽しいか

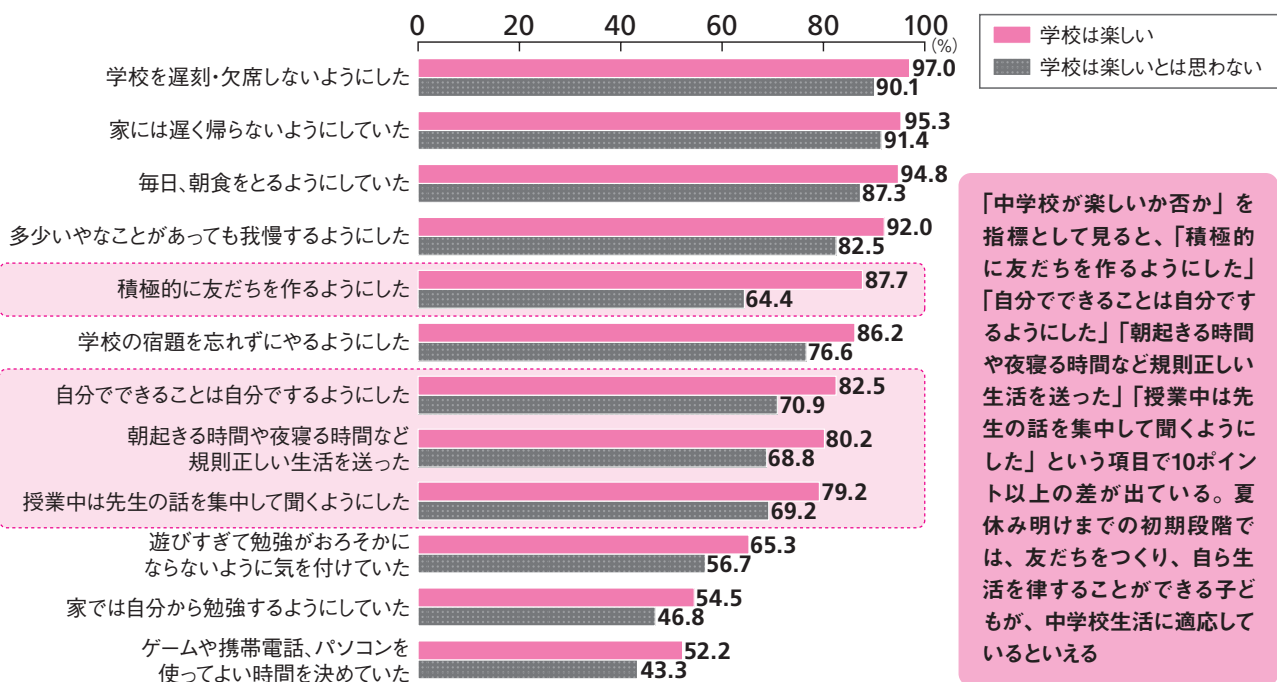
とてもあてはまる ややあてはまる どちらともいえない あまりあてはまらない
まったくあてはまらない



中学校に入学して学習スタイルや学習進度が変わることで、9割近くの子もたちが苦手意識を抱く教科をもつようになる。いわゆる中1ギャップの一端だが、反面、約8割の子もたちは、中学校生活を楽しんでいる。環境の変化にとまどいながらも、努力して充実した中学校生活を送ろうとする子どもたちの様子がうかがえる

友だちづくりと規則正しい生活習慣づくりが中学校適応への鍵

中学校の入学後、夏休み明けくらいまでにできていたこと (回答:中学生)



「中学校が楽しいか否か」を指標として見ると、「積極的に友だちを作るようにした」「自分でできることは自分でするようにした」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活を送った」「授業中は先生の話集中して聞くようにした」という項目で10ポイント以上の差が出ている。夏休み明けまでの初期段階では、友だちをつくり、自ら生活を律することができる子どもが、中学校生活に適応しているといえる

注1) 「学校は楽しい」は「中学校生活は楽しいか」という質問に「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と答えた子ども、「学校は楽しいとは思わない」は「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた子どもの割合

注2) 15項目中、一部を抜粋して紹介

出典: ベネッセ教育総合研究所「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

調査時期は、2012年7月。調査対象は、全国の中学2年生とその母親(3,043組)、調査方法はインターネット調査で、中学1年時を振り返る形で質問し、3,043件の回答が回収された時点で調査を終了



上記の関連データはコチラ!

<http://berd.benesse.jp/>

*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2013 Vol.2特集「自ら表現したくなる授業づくり」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

※「VIEW21」小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp>)でご覧いただけます。

◎今回の特集は、新課程で1番のポイントとなっている「思考力」を、表現を通して考えるきっかけをつくってくれました。現場では、ややもすると「表現」が目的化しがちです。子どもたちは自分の思考の過程を表現することで見直し、判断し、確かな解決へと向かいます。そのことを改めて学ぶことが出来ました。[北海道/O小学校]

◎表現力と思考力は一体で補完関係にあるということ、教師がきちんと認識しておかなければならないと思います。子どもの学習能力には個人差があるので、一人ひとりの子どもに対する支援をよく考えて、授業改善に努め、教員全体が共通認識をもつことが不可欠だと思います。[福井県/S小学校]

◎茨城県おみたま小美玉市立羽鳥小学校の取り組みが参考になりました。本校でも、算数科において研究を重ねてきています。「つなげて発言」をキーワードに、子どもの表現する力を、子ども同士のつながりを通して高めようとしています。[長野県/H小学校]

◎東京都ふっき福生市立福生第五小学校の「主体性を育む授業づくり」に向けた授業改善で明らかになったポイントを類型化した「15の手だて」がとても参考になりました。また、特別支援教育の視点を取り入れることは、通常学級での指導にも役立ちます。ぜひ、この手だてを本校でも生かしたいと思います。[千葉県/T小学校]

◎本市も昨年度から全小・中学校がE S Dを推進し始めました。福島県会津若松市立松長小学校の取り組みでは、

思考力、表現力、行動力を育む手法がより具体的で参考となりました。特に、海外の学校と姉妹結縁によって、子どもたちの視野を広げ、国際的な感覚を豊かにしている本校にとって、「急がず、スモールステップを積み重ねることで徐々に活動を広げていく」という考え方は大いに納得しました。[滋賀県/K小学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の長野県岡谷市立神明小学校・宮坂昌一校長の記事で「教材は自分の足で探し、人との出会いでつくる」という言葉が心に残りました。大学で社会科を専攻し、中学で社会科を教えていましたが、「社会科教師は常にアンテナを高くし、足かせげ」と先輩教師に教えられたことと重なりました。[熊本県/O小学校]

◎「Benesse 発 これからの教育」の栃木県かぬま鹿沼市立みなみ小学校の記事に、「子ども一人ひとりの課題を明確にし支援計画を立てる」とありました。小さなつまづきが雪だるまのように膨らみ、学業不振や問題行動を起こす子どもがたくさんいます。一斉に学習することばかりがよいわけではなく、出来る限りいろいろな手をつくして、子ども一人ひとりを支援していくことが大切だと思いました。[栃木県/S小学校]

◎「つながる学校と家庭の学び」の北海道びえい美瑛町立美瑛東小学校が行う、6年間の記録を書きとめる「マイノート」は、すばらしい取り組みだと思います。1年生から進めるキャリア教育は、将来の夢や希望に向けて具体的な目標をいかに持たせるかが大切だと思います。[和歌山県/N小学校]

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

今回の特集では、家庭学習の質や量を考えると共に、保護者との信頼関係を築くためのヒントをご紹介できたという思いがありました。「深い愛情の下、厳しく接する方がよい場面もある」「先回りして言葉やモノを与えずにいる」。一人の親として反省し、考えさせられる言葉も多くいただきました。子どもがたくましく生きていけるように、どこまで手をかけて、見守って、離れるのか。小学校の先生方の指導観から学べる事が多くあるように感じました。(杉田)

VIEW21 小学版 2013 Vol.3

2013年11月11日発行 / 通巻第38号

発行人 岡田晴奈
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所

印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ、丹羽三千代
執筆協力 二宮良太
撮影協力 荒川潤、川上一生、谷口哲、
南弘幸

イラスト協力 幸剛

◎お問い合わせ先

情報編集室
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3390

色とりどりの学びの情景

海から学ぶ学校

表紙の学校 山口県下関市立神田小学校



同校はグラウンドそばの砂浜で行う「海の終業式」で知られる。毎年1学期の最後の日は、子どもたち全員が海辺で夏休みの目標を宣言した後、いかだ遊びやサザエ採りを楽しむ



授業参観日に、保護者も参加する避難訓練を実施。海拔25メートルの裏山への避難を体験して分かったのは、「子ども以上に、教師や保護者がしっかり体力づくりをしなければならない」ということだ



災害はいつ、どんなタイミングで起きるか分からない。教師の指示がなくても迅速に避難できるようになることが目標だ

下関市豊北町の神田小学校は、校舎から歩いて1分で砂浜という立地にある。子どもにとって海は絶好の遊び場であり、休み時間も先生と一緒に自由な水遊びを楽しむ。だが、海には怖い面もある。最新の調査では、山口県西部の菊川断層帯で地震が発生した場合、最速5分で津波が到達すると分かった。

そのため、同校は近年、防災教育に力を入れ、火災や地震を想定した避難訓練を年3回以上実施する。

児童数35人の小規模校だが、子どもがいつも教師の目の届くところにいるとは限らない。だからこそ、1～6年生全ての子どもがいざという時には自力で避難場所に行けるようになることが目標だ。

磯や砂浜の生き物を調べたり、清掃活動を行ったり、子どもたちは海から日々多くを学んでいる。自然の大切さを知り、その力の前に謙虚であるべきことを知った時、海の町に住む者として更に大きく成長する。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2013

Vol.2 自ら表現したくなる授業づくり

Vol.1 授業で高める自己肯定感

2012

Vol.4 学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

Vol.3 授業が活きるICT

すべての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または で

次号 Vol.4 は 2014 年 2 月中旬発行(予定)です